

# 幻想と忘却

けんちく

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現実世界にも妖怪は居る

妖怪だけじゃない

神様も居るし悪魔とか天使とかも居る

でも今の人達ではそれらを見ることは出来ない

この話はそんな妖怪達の中でも少し変わった青年の話

元・忌み子と呼ばれた青年が幻想入りしてほのぼのする話、です！

長くてくそだからタイトル変えた

中身は変えない

大福を肉まんにしたみたいな

・・・  
はい

# 目次

第一話 幻想 1

第二話 侵入者 13

第三話 天魔 25

第四話 家族 38

第五話 急襲 49

第六話 もう1人の 65

第七話 魂 73

第八話 戦闘部隊 84

第九話 博麗の巫女 93

第十話 陽は沈む 102

第十一話 迎え 118

第十二話 あの日の 130

第十三話 ひとつふたつ 146

第十四話 戯れ 159

第十五話 信愛 172

第十六話 交えるもの 181

## 第一話 幻想

? 「ああああ! クソツタレ!」

汚い言葉を吐きながら雲ひとつない綺麗な空を

1人の妖怪が飛んでいた

俺の名はセト

苗字は無い

俺は今日烏天狗の住処から追い出された

セト 「ああ! 良かったよ!

あんな所出れるなんて俺は幸せ者だなあ!」

大声でそんなことを言いながら俺は行くあてもなく飛んでいた

ほんとはめちやくちや寂しい

いやほんとよ?

俺を追い出した烏天狗達は、大つ嫌いだが

いなくなつた途端何か欠けた気分だ

話し相手という話し相手もないし…

ああ…鳥達は居たな

かーかーと鳴きながら鳥達は俺に寄ってきた

こいつらはほんとに可愛いんだよ

色んなこと知ってるから聞く分には飽きない

たまに頼りになるし

鳥達の話 راラジオのように聞き流しながら

俺は住処での事を思い出していた…

「まだ居るのかい…あの忌み子…」

「あんな子…早く出て行って欲しいわ…」

「いつそ忌み子の親のように処刑すればいいのに」

「よしなさいよまだ子供よ」

近所の人達からそんな声が聞こえる

俺は生まれた時から忌み子だと言われた

両親は俺をかばいながら育ててくれたようだが

俺が10歳になる時…

公衆の場で処刑された

あの日の事は忘れない

両親が遅いので探しに行った時

俺は見た

両親の首が落ちる瞬間を…

喜びの声で溢れかえる様を…！

セト「ふざけるな…!!」

つい声が出てしまった

烏達が驚く

セト「ああ…ごめん君たちの事じゃない」

良かった！良かった！と口々にそんなことを言つてまた話を始める

またあの光景を思い出す

俺の両親が何をした

規則を破ったから？それだけで処刑を？

なんでそんなこと…

怒りが溢れてくる

だが当時の俺に何かできる力は無かった

俺もいつか処刑されるかもしれない

毎日そんな恐怖に耐えるしかなかった

だがそんな事は無かった

俺は処刑される事はなく

毎日近所からの悪口が耳に入るだけ

そんな毎日を送っていたある日

長から呼び出しがあった

…とうとう処刑なのか？

感じた事の無い恐怖が込み上げてきた

しかし、かけられた言葉は単純なもので

ここから出てけと

—————

そして現在に至る

セト「おつともうこんな時間か」

いつの間にか日が落ちていた

そろそろ寢床を探さねば

セト「この木の上とか良さそう」



すると、僕も一緒！私も！と烏達が寄つてきた  
どおんだけかわいいいんだよお

セト「おー！良いぞ！」

悟られないように平静を装う

住処の事をおもいだして気分が悪い：

俺は歌を歌う事にした

昔から好きなんだ歌うのが

さてそんなこんなで1日が終わつた

そして何日か寢床を探すだけの日々が始まつた

ここが日本なのかどうかも分からない

そんなある日：

起きて！起きて！と烏達が騒いでいる

セト「なあにいろ」

何かあつたのかな？

眠い：

まだ日も登ってない…

早く！早く！いいから！いいから！

とうるさい

セト「ぬあくなんだよお眠いんだよ」

と言うがとつくに目が覚めてしまった

着いてきて！着いてきて！

と言っている

んーやる事無いしなあ

少し考えた末…

結局着いていくことにした

セト「うん分かった、案内してよ！」

やった！やった！と言いながら鳥達は飛び立っていった

俺もそれに続いて飛び立つ

しばらく飛び続けた

セト「まだー？」

まだまだよ！まだまだよ！

セト「まだかあ…」

……

そろそろ！そろそろ！と急に言い出したので  
ぼーっとしてた意識を戻す

だが目の前には何も無い

セト「……いや何も無いんですけd…」

ニユル

変な感覚がした

風が変わった

空気が違う

セト「……へ？」

着いた！着いた！と言っている

なんだ……ここ……

目の前には悠々とそびえ立つ巨大な山

どこまでも続く深い森

さつきまで何も無かったはずの場所に

その光景は広がっていた

ここだよ！ここだよ！居場所！居場所！

セト「…居場所？」

訳が分からない

…いや、訳が分からないw

なんだよここ…

状況の整理がつかないまま

考えを巡らせてた時

セト「あれは…烏天狗？」

奥からものすごいスピードで烏天狗らしき人型のものが飛んでくる

？「あやややや？こんな朝早くに何してるんです？」

女性か

目の前で止まった女性は

シヨートヘアで白いシャツ黒いスカート

頭に赤い帽子をちよこんと乗せている

可愛い

？「というか…見た事ない顔ですね

烏天狗ではあるようですが…どちら様ですか？」

セト「ええと〜」

？「ああすみません

こちらから名乗るといのが筋というものですね！

私は射命丸文です！文屋をやっております！

さあ！名乗りましたよお！さてそちらは？」

セト「ああええつとー」

状況の整理つかねえなあ：

セト「俺の名はセトです

旅の途中でここに案内されました：：鳥に」

あや「鳥に：：なるほど

それと状況の整理がつかないということは

もしかしてここ初めてですか？」

あれ、声に出てたか

セト「ええ、まあ」

あや「なるほどなるほど

あー分かりました新しく幻想入りした方ですね！」

セト「幻想：：入り：：？」

ナニソレオイシイノ

あや「その通り！ここは幻想郷という場所です！ね！

外の世界で幻のようになった存在が集う場所です！」

ほ、ほう…

あや「まあ幻想郷に来たからには外の世界に簡単には戻れませんし…なんなら歓迎しますよ？」

!!

セト「え？え!？」

良いんですか？本当に!？」

突然の事で思考が固まる

ほんとに良いのか？俺なんか？

居場所ってそういう事？

あや「ええ！もちろん！

あなたに興味もありますし！里のみんなも歓迎してくれると思いますよ！幻想入りした烏天狗もたくさん居ますしね」

興味あるなんて嬉しいこと言ってくれるなあ

それに似たような感じが入ってきた烏天狗達も居るかも

あや「でも流石に上にも確認とか神社の方にも顔を出さないと…」

それと…とあやは続ける

セト「？」

あや「あなた、その角はなんですか？」

角「ああ！言つてなかつたな

セト「言つてませんでしたね

この角が生えてる理由…

実は俺

「烏天狗と悪魔の混血なんです」

あや「あやややや!!なんと！そうだったんですか！

ずっと気になってて…

いやーとても記事にしたいです！意欲が！沸きます！

着いてきてください！仕事場まで！

さあさあ早く早く！」

強引に手を引かれそのままあやに引つ張られた

ああ…こんな可愛い子に手を引かれるなんて

夢にも思わなかつた…

セト「あああああああああ!!! (はやい!!!)」

こうして忌み子と罵られ、不幸に生きてきた青年の  
楽しい楽しい幻想生活が始まるのであった

？「あらあら、あの子だったのね…」

そう言っ

空間を割いたような場所からこちらを見ている女性がいた事に2人は気づいていな  
かった



## 第二話 侵入者

あや「ほうほう！そんな事があつたんですねえ」

俺は今あやさんから取材を受けてる

今まで何処で住んでたとか

どういう経緯で幻想郷に来たのかとか

というか眠い。けど話したい。

感情がぐるぐるしてる

ある程度の取材が終わるとあやさんは

あや「なるほど！大抵いい感じですねー」

それではちよつと作業してきます！そこら辺で休んどいてください！」と言つて立ち上がった

セト「新聞作るんですか？」

あや「そうですね！あなたの記事を書いて完成というところですよ！まあさつきまでしてた質問は単なる興味ですけど」とあやは笑つて

「それでは」とばたばた奥へと走つていった

単なる興味でも話せて嬉しいなと思いつつながら

俺は窓が目の前にある机の前で座った

しつかしい部屋だなぁ

木のいい香りがしてなんか、落ち着く

女の子らしさというものは感じない

仕事場って感じだ

そんな事を思っていたらまぶたが重くなってきた  
すると

? 「こーんにちはく」

どこかから聞いた事の無い声が聞こえる

なんだ怖いぞ陽気な声してるのに

俺がキヨロキヨロしてると

? 「ここよ、ここ」

上を見上げると金髪の長い髪がこちらを見下ろしていた

セト「……うお!」

なんだ……!これ!

「ふふふ、可愛い反応するじゃない」

そう言つて空中に消えたと思つたら

隣の空間から女性が出てきた

？「さつき挨拶したのは私よ

名前は八雲紫

幻想郷での重要な妖怪の一人よ」と流れるように挨拶をしてきた

セト「は、はあそうなんですか

い、いやーびつくりしましたよ空中から出てくるなんて」

眠くて半目状態の中そんな事が起き

すつかり目が覚めてしまった

紫「あらあらごめんなさいね

驚かせるつもりはあつたわ大成功ね」

そう言つてくすくすと紫さんは笑つた

いやあつたんかよ！やめようよそういう事！

セト「あはは：：そうだったんですか

それで紫さんは俺に何の：：」

紫「あー用というのよね

結界に異常を感じたもんだから駆けつけただけよ

幻想郷に何かあつたら大変ですもの

そこであなたを見つけて話したかっただけ」

あーなるほどそういう事ね

セト「という事はあなたはなにか監視的なことをしてゐるって事ですか

すみませんなんか勝手に入ってきちゃって」

紫「別に良いのよー

入ってきちゃつたなら歓迎するし

監視してゐるってのも正解よ

ただ危険がないか確認したかっただけ

あやちゃんとも上手く打ち解けたみたいだしね」

あ、良いんだ

まああやさんとは取材されたただけだけど

すると

あや「でーきましたー

早速配達してきま…あや？紫さん？」

紫「お邪魔してまゝす」

お、あやさん来た

あや「何してるんですか」

私の職場で」

じろりと紫さんを見た

紫「別に何もしてないわよ」

ただこの子とお話してただけ」

あや「用が無いなら帰ってもらっていいですか」

頬を膨らませながらあやが言うと

紫「あらやだ冷たいわねえ

分かったわ帰るわね」と紫さんは言い隙間を開いた

その時

紫「あなた：吞まれちゃだめよ：」

セト「え：？」

そう言つて紫さんは不敵な笑みを浮かべながら隙間の中に消えていった

セト「：なんなんだ：あの人」

あや「彼女は神出鬼没なんです

ほんとにどこにでも現れるんですよね

たまに迷惑してますよ」

あなたもあの人には気をつけて下さいね

と言つてあやは配達の為か空へ飛んでいった

セト「また…1人か」

そういえば、あつちの世界でもこういう時間沢山あつたな

あの頃は孤独感というのもあつたが…

この場所はなんだか包んでくれるような優しさを感じる

ほんとにいい場所だなあ

…

外の空気を吸いたくなってきた

ちよつと外へ出てみよう

ガチャリとドアを開け外に出る

セト「うひょーい風だなあ」

外は涼しい風が吹いていた

空気が気持ちいい

風に揺られて木々もザワザワと音をたてている

セト「ふいー」

と地面に腰をおろし

寝っ転がった

…ガサガサ

セト「…ん？」

？「やいやいやいやい!!」

白い毛玉のようなものが飛び出してきた

いや毛玉じゃない…狼人間？

？「お前！何者だ！烏天狗ではないだろう！

その角が証拠だ！侵入者め！覚悟しろお！」

早口で言うやいなや突然

背中にさしている大振りの刀を抜いてきた

セト「ちよ、ちよつと待つて！ひゃあつ！」

すんでのところで刀を避ける！

？「ちよこまかと避けるなあ！妖怪の山に無断で入るなど許されん！」

ブオンと風を切る音がする！

セト「あつぶ…！くっ足が」

足を掠めて体制を崩してしまった

？「しねい!!」

刀が眼前に迫る！

セト「し…!!」

「やめなさい!!!」

声が響いた

そこには…

セト「あ、あやさん…!!」

？「あ、文様！」



あや「白狼天狗！この方は私の知人です

侵入者ではありません

その刀を収めなさい！」

白狼天狗「そ、そうだったのですか！

事情も知らずに切ってしまったの申し訳ありません

どうかご勘弁を！」

と白狼天狗は素早い動きで土下座をしあやさんに許しを乞うている

あや「もとからあなたは許す気です

仕事をしただけですから

ただ何も聞かずに切りかかるのはどうかと

白狼天狗「ははー！申し訳ありません!!」

あや「もういいです行きなさい」

そう言うのと白狼天狗は威勢のいい返事をして森の中へと消えていった

……一件落着？こーわっ、死ぬかと思っ

てかあやさんかっこい！

あや「セトさん大丈夫ですか？

すみませんまだ山の人達はあなたの事を知らないのだからあのような事を…

それにしてもちようど配達が終わったところで良かったです」

セト「あ、だ、大丈夫ですよ

怪我も無いですし

ちよつと死にかけましたけど」

はははと引きつった笑いを浮かべた

あや「それなら良かったです！あ、そうだしつき会った白狼天狗なんですけど

あの人は山の監視をしてるんです

仮にもここは天狗たちのテリトリーなので勝手に侵入されると困るわけですよ

なので侵入者は始末するようにあの人は働いています

当然剣の腕もたちますよ！」

始末って、こわー…

セト「で、でもああいう事があると結構怖いですね」

あや「そうですねーこれ以上続くとあなたの身も持ちませんし……

あ！そうだ！天魔王に直接会いに行きましょう！そうすればこの山の皆もあなたを

納得するはずですよ！」

セト「天魔…様？」

偉い人？

あや「そうです！この山の長です！」

!!??

セト「そ、そんな人に今から会って大丈夫なんですか？」

あや「善は急げですよ！ささ！着いてきてくださいーい！」

そう言つてあやは飛び出していった

セト「ま、まっってくださいーい！」

そして…

セト「で、デカーーーーー!!!」

こ、ここが天魔様の城…

でええ…めっちゃ立派

あや「ささ！早く行つてきてくださいーい！」

私はここで待っていますから

門番の方にも許可はとつてあります！」

確かに門の横に槍を持った烏天狗が2人いる

セト「し、失礼しまゝす…」

と恐る恐る門を開いた

途中ギリりと睨まれたが通してくれた

なが〜い廊下を進むとそれらしい襖が目の前にあつた

セト「…こ、ここかな」

これまた恐る恐る襖を開くと

？「ほお…おぬしか

先程から山から出てきている異質な気の正体は」

この子が天魔様…

やべえ〜、息つまる…

## 第三話 天魔

この子が…天魔様…

可愛いな…でもそれ以上に溢れ出るオーラが凄い…

天魔「どうした

何をつつ立っておるこつちへ来い」

と低い声で呼ぶ

セト「は、はい…！すみません！」

(こえーよこえーよ…！うう…なんでこんな事に…)

ビクビクしながら前へ進んだ

天魔「ほお、お主面白い角を生やしておるな

鬼の子か？」

セト「い、いいえ、

俺は悪魔と烏天狗の混血でしゅ…です…」

(ああああ！囁んだあ！)

天魔「クツクツク…ほお、悪魔と…か

どれ、お主の顔をよく見せてくれないか」

セト（いやちよつとハードすぎる！）

と思つたが天魔様の要望を断るわけにもいかないので

恐る恐る顔を上げ天魔様を見た

天魔「ほお良い目をしてるじゃないか

どこか頼りなさげだが…なにか熱いものを感じるなあ」

と天魔はジロジロと顔を見た

セト（何か知らんが褒められた…のか？）

天魔「む…気を悪くさせたか？

すまないこういう喋り方なんだ

そう固くなることもないぞ」

少し心配そうな声でそう言った

セト「い、いえすみません

来たばかりなのに妖怪の山のトップの方とお話させて頂いてなんとというか頭の整理

がつかなくて…へへ…」

天魔「来たばかり？という事はお主外の世界の者か？」

セト「そうなるんですかね…？来てしまったからには

「ここで生活しようかなと」

天魔「なるほど、それでわしの所にな  
良いぞ許そう

こちらとしては大歓迎だ

だがその前に一つ……いいか？」

と天魔はまっすぐこちらを見てきた

セト「はい、なんでしょうか……？」

（首を貫うぞとかだつたら怖いんですけど）

天魔「その角……触らせてくれないか？」

セト「……へ？」

あまりにも意外な事で間の抜けた返事をしてしまった

天魔「良いではないか！減るもんでも無いだろう！触り心地良さそうではないか  
！」

と天魔は座りながらびよんびよんしている

セト「いい、良いですよ？」

（急だなあ）

天魔「やったー！では早速……」

と手を伸ばしてきた

セト（おいおい、キアラ崩壊してるぞ

でもこんな可愛い人に触られるのも悪くは無い

近づいたらわかったけど天魔様って身長低いんだな）

スベスベ：

天魔「ほお！ツルツルだな」

スベスベ：

天魔「それにツヤツヤだ手入れとかしているのか？」

目を輝かせながら聞いてきた

セト「いえ、特には…」

（顔が近い…）

サワサワ：

天魔「…」

キュツキュツ：

セト「…」

（くすぐったいけど意外と気持ちいいな）



ナデナデ…

…3分後…

セト（長いなあ！おい！）

セト「あの、天魔様？」

天魔「ムフフウ…」

と笑う天魔の顔は緩くなっていた

セト「天魔様？」

天魔「む！なんじゃ！」

シヤキつと返事をする

セト「もう、そろそろ…」

恐る恐る聞くと

天魔「ん、ああ！すまない

すっかり我を忘れておったぞハッハッハ

と笑った

セト（つて言いながらまだ触ってるし…）

…更に2分後…

天魔「いやー満足満足！」

ムフフと笑いながら手を離れた

セト（や、やつとか途中気持ち良くて寝そうになったぞ）

天魔「あのカーブの所凄く良かったぞ！」

と少し興奮気味で言ってきた

セト「よ、良かったです…」

天魔「む、まだ固いなお主

ガチガチだぞ

そうなるとわしも喋りづらい

もう少し気を緩めてもいいんだぞ？」

少しムツとした表情をしている

セト「そ、そんな、いいんですか？」

天魔「良い良い！ほら背伸びしてみろ

ぐーっと！ほら！」

と天魔は両手を上げて背伸びしろと促してきた

グー

セト「つあああ！少し気が楽になりました」

途中骨がバキバキと音をたてた

天魔「クツクツクツ…気持ち良さそうに背伸びをするなあお主

さで、お主の気も緩んだ事だし

住む所の話でもしうか」

セト「はいもう決まってるんですか？」  
と聞くと

天魔「ああ、東に里があつてな

もう使われていない一軒家があるんじや

そこがお主にちようどいいと思う

年頃の近い烏天狗も沢山おるぞ？」

と答えた

セト「い、いいんですか!?勝手に使っちゃつて」

天魔「ああ、そこは使つても良いぞ

長年誰も住んでないのでな

それと：背伸び効果はすごいのお

思い付きでやつたが話しやすくなつたぞ」

セト「思いつきだったんですか笑

でもありがとうございますかなり話しやすくなりました」

あははと笑つた

天魔「うむ、わしはずつとこの部屋に居て退屈なんじや

お主のような者と話す機会もないのでな

今日お主と話してて楽しかったぞ」

という天魔の顔は明るかった

セト「ほ、本当ですか？」

天魔「ああ本当じゃ

わしは緊急事態でもない限りあまりやることがないんじや

出掛ける事もそうそう出来なくてな

この城は里の者も恐くてあまり近づかないのじや

この広い城でいつも一人じや」

天魔はどこか寂しそうな目をしていた

天魔「暇な時にでもここに来てくれ

門番にも声をかけておく

お主とは話せて良かったぞ

それと…お主の名前まだ聞いてなかったな」

セト「あ、そうですね

俺の名はセトです」

天魔「セト…か

ありがとう覚えておくよ

わしの名は天魔じや

よろしく頼むぞ」

セト「はいよろしくお願いします！」

天魔「そうだ、里の行き方は分かるか？」

セト「んーと文さんに聞いてみます」

と言うと

天魔「ほお！文ともう知り合ったのか！」

セト「ええここにきて初めて会ったのが文さんでした」

天魔「なるほどのお文なら任せられるな

ではそろそろ行くがよい

今度あつた時も角を触らせてくれよ？」

セト「あはは：分かりました

またお話ししましょう！

では失礼します」

天魔「うむ！妖怪の山を楽しむと良いぞ！

ここは綺麗な景色が多いからな！」

セト「はい！ありがとうございます！」

そう言つて俺は天魔の城を後にして

門の前でまた門番に睨まれ小さくなつた

あや「あ、セトさん！おかえりなさい！」

門を過ぎた辺りで文が眩しい笑顔で迎えてくれた

セト「ああ、文さん、怖かったですよお」

あや「まあ、あの人は喋り方怖いですよねえ

でも話していくうちに慣れませんでした？」

セト「はい…かなり仲良くなれた気がします」

あや「良かったじゃないですか！」

天魔様と仲良くなれるなんて凄い事ですよ！」

とあやはびよんびよんしている

セト「それなら良かったです」

(天狗つてびよんびよんする人多いのかな

てか文さんびよんびよんしてるの可愛い…)

? 「おかえり! おかえり!」

と聞き覚えのある声が聞こえた

セト 「ん? この声は…」

おおー! お前らああ!!」

目の前に

いつもの鳥3匹が居た

セト 「何してたんだよどこいったんだく!」

鳥達 「色々! 見たた! 木! 川! 葉っぱ!」

セト 「そうかそうかくうんうん

それと! 重大発表だ! 東の里つて所で住めるようになったぞく!」

あや 「ほんとですか! 良かったですね!

東の里なら案内出来ますよ!」

鳥達 「やった! やった!」

セト 「おおお! よろしくお願いします!

早速行きましょう!」

あや 「ふふふ、鳥達に会ってから楽しそうですね」

セト 「あ、すみません昔からこの3匹とは仲がいいんです」



あや「なるほどなるほど！」

いい関係ですねえ

それじゃ行きましょうか！」

セト「はい！」

2人と3匹は一斉に飛び立った

そして…

あや「ここが！東の里ですよ！」

目の前に現れたのは

大自然に囲まれ、子供達の笑い声が聞こえ

鳥がさえずりとても綺麗で平和な場所だった

## 第四話 家族

セト「う…う…うん？ここは？」

目を開く

まず目に入ったのは木目の天井

そして西日の光

少し埃っぽい空気に不快感がした

いつの間にか眠っていたようだ

起き上がり周りを見渡す

木造の壁

障子から漏れる光

そして、蜘蛛の巣

かなり古く感じたのはこの埃っぽさと蜘蛛の巣の影響だろうか

何故こんな所に？

その疑問を晴らすため記憶を巡らす

…そうだ

文さんと一緒に東の里へ来て

そして少し小高い丘にポツンとある家を見たんだ

そこが天魔様の言っていた家だと教えられて

それで、それで：

ああ！思い出せない

多分ここはその家なんだろう

とすると、ここが俺の家か

セト「いや、ボロいな」

そうは言ったが不思議と笑みがこぼれ

なんだかくすぐったい気持ちになった

セト「本当に、ここに住んでもいいなんて…」

とても嬉しかった

すると

バサバサと馴染みのある羽音が聞こえてきた

鳥1「セト！起きた！起きた！」

鳥2「ほんとだ！起きてる！」

鳥3「ほらね！やっぱり死んでない！」

と口々にそういう鳥たちをみてホツとした

セト「おいおい：俺がそう簡単に死ぬかよ」

そう笑いながら言つた後

今までの経緯を鳥たちに問いかけた

鳥2「あのねあのね！セトのね！家をみたの！

そしたらね！セト、そのまま倒れちゃつたの！」

鳥1「おそらでたおれたからそのままヒュー！どきー！つて落ちたの！」

鳥3「死んだとおもつた！そしたらあやさんがね！

ずつと起きつばなしだから疲れたんだらう！つて！

起きつばなしだと疲れるの？」

セト「ああ、そうだよ

ずつと起きてると疲れちゃうんだ

お前達は寝たい時に寝てるから知らないか」

はははと笑いながら鳥たちを撫でる

そうか、そんな事が：

ん？待てよという事は

俺を運んで布団まで敷いてくれて

寝かせてくれたのは、文さん!?

セト「……………」

やべえめっちゃ嬉しい

顔が赤くなってるのがわかる

しかしそれと同時に申し訳ない気持ち

込み上げて来た

今からでも謝りに行こう

と布団から出て急いで向かおうとする

…が

ギョルルルー

セト「お、お腹がすいて力が出ない〜」

へろへろ〜と崩れてしまった

鳥1「なんか食べれるもの持って来るよ!」

鳥2「僕も行くー!!」

鳥3「あははー!倒れてる!面白ーい!」

セト「くっそ〜笑いやがって〜」

だがこんな会話も久しぶりだった

ここに来る前はどうか一日を生きるか

それだけ考えていたからだ

そして少し経って鳥たちが戻ってきた

鳥1「色々あるよー！」

鳥2「これとか美味そう！」

それらは外の世界でも馴染みのある木の実、キノコ等だった

セト「これ食べば何とか持ちそうだな

よっしゃー！さっそく食べよー！」

わーいと鳥達も一緒になって食べ始める

ボロい家の一室に

青年1人、鳥3匹

日もすっかり沈んだ里の

その小高い丘に響いた笑い声は

とても幸せそうにこだまして

どこからか入って来た風は

優しくセトの頬を撫でた

セト（……ん？どっから風入って来たんだ？）

文「こーんばーんは!!」

セト「おわあ!」

急に後ろから大声を出され

驚いた拍子に転んでしまった

その様子を見て烏達が笑っている

文「あややくすいません

氣づいてるもんだと……」

セト「そ、そんなわけないじゃないですか!

ていうか!どこから入ったんですか!」

文「あややや!そうですね!

鍵がかかってないもんですから

正面から、入りました!」

言われてみれば当然である

なぜ起きて鍵をかけなかったのか

セト（今度から気をつけよ……）

とセトは心に決め、そして

何故ここに居るのかを聞いた

文「そりやもちろん昼間の事が心配で来たんですよ！」

急にぶつ倒れたんですよ!?寝顔を撮りたいってのもありました！」

最後になにか違和感を感じたが

そのまま話を聞いた

文「そして来てみたら楽しそうに話してる声が

聞こえたので混ざりたいな〜と」

えへへと笑いながら頭をかく

彼女は子供のようにも見えた

セト「そうだったんですか、でも入る時は何か声をかけてくれないと」

と言いかけたところで

文「かけましたよー!3回ほど

失礼ですね!常識です!」

セト「え、ほんとですか!?す、すみません」

と謝ると

もう!と言つてそっぽを向いてしまった

(ああ〜どうしよう!文さんを怒らせてしまった…)



と思つたのも束の間

文「それにしてもボロっちい家ですねぇ

大丈夫なんですか？こんな所で」

(よかつた…怒つてなさいやう…)

セト「こんな所でも俺の居場所があるつて事が嬉しいんですよ

流石に掃除しないとイケないですけど」

はははと笑いながらそう言つたが

文は表情を曇らせた

文「そんなに、そんなに外の世界では居場所が無かつたんですか」

と言われた

そんな事まで察してしまうよな

彼女の洞察力に関心はしたがすぐに

セト「いや、そんな事はないですよ

こいつら(鳥達)もいましたし

少ないですけど友達もいました

ただ大人達からは気味悪がられてましたけど」

文「そう、だつたんですか

でも良かったです！全く無いわけでは無さそうだったので」

(やばい、重い)

ひーこういう空気苦手

そうだ、烏達よヘルプって寝てる〜！)

あつ

セト「そうだ、俺、文さんに会いに行こうとしてたんですよ」

文「へっ、な、なんでですかいきなり！」

セト「今回の件でお礼をしたくて

何か出来ることがあったらなと」

文「あ、あーそうですか！お礼ですか

そうですねえ、急に言われましたも…」

むむむうと文は考え込んでしまった

(そうだよな、急に言われてm…)

文「あ！明日！人里に一緒に行きませんか！

案内しますよ！」

(おおう早い)

シユバつと顔を上げ文は目をキラキラさせている

(とういか人里……ここにも人はいるんだな……)

セト「人里ですか、楽しみです！」

文「それは良かったです！それでは明日とか良いですか？」

セト「はい、恐らく」

文「分かりました！それでは昼過ぎに迎えに来ますね」

セト「はい」

文「それではそろそろいい時間なので私はこれで」

セト「あ、送りますようか」

文「場所、分かるんですか？」

と文は悪戯に笑った

セト「……わ……からないです……」

文「あははは！セトさんはほんとに面白いですね！

気持ちだけは受け取っておきます！」

ありがとうございます

では、おやすみなさい」

セト「はい、おやすみなさい」

そう言つて文は空の黒に溶けていった

おやすみなさいと誰かに言われ

おやすみなさいと返す

そんな些細な事でさえ

セトにとつてはとても特別な事のように

自然と笑みが零れていた

一方：

文「ふうーびつくりしちゃったなあ

いきなり会いに行こうとしてたなんて言われたら

男の人ってそういうの簡単に言っちゃやうのかな……」

と文は闇の中で呟いた

夜の闇は微かに紅くなつた文の頬を

静かに隠し

文はグンとスピードを上げた

## 第五話 急襲

暗い暗い森の中、

何かが追いかけてくる。

生き物なのかはたまた概念なのか

僕は必死で走っている。

何故か飛べない。

しばらく走った。

目の前にはそびえ立つ崖。

行かなければ逃げなければ。

必死に登ろうとするが上手く力が入らない。

心配がし後ろを振り返る。

子供。笑っている。

クスクスケタケタ

僕を嘲笑うかのよう。

そして笑い声は耳を塞ぐほど大きくなり

そして…

セト「は…！……ふっ…ふー…」

目が覚める。

外は丁度日が出てきた所のようで  
空はまだ淡い水色のように見えた。

セト「あいつらは…寝てるか…」

カラス達は3匹寄り添うように眠っていた。

セト「顔…洗うか」

まだ目がしよぼしよぼする中

外に出て近くの川で顔を洗う。

家に水道は通っているみたいだ

なんでもかっぱ？達がやってくれたらしい。

だが川の方が慣れている

冷たい水の感触で肌が張る感覚があった。

あの不気味なものを見たからか

久々に生きている心地がした。

家に入り

縁側に座る。

カラス達はまだ寝息をたてている。

時間にして今は6時頃だろうか。

文さんは朝早いらしいから

もう起きてるのかな。

あ、掃除もしなくちゃいけない。

お金とかどうしよう。働くにしても

ここはどうやって稼いでいるのか。

などと考えながら

元の世界で聞いた歌を口ずさむ。

我ながら危機感がないというかなんというか。

紫「あら、暇そうね」

セト「……! あ、紫さん、おはようございます」

驚いて少し息が詰まってしまった

そこには空間を割いて上半身だけ覗かせる紫さんがいた

紫「はいおはよう！いやね幻想郷の生活はどうかナーって思って来ただけよ  
そんなに驚くことないじゃないふふふ」

いや驚くだろと心の中でツツコミを入れると

紫さんがピクつと反応するので

もしかしたらこの人、

心まで読めちゃうんじゃないのか

という錯覚に陥る

セト「あー結構楽しいですよ

景色も綺麗だし空気もおいしいし

それで今生活とかどうしていいのかなーって」

こういう人には素直になつた方が懸命かもしれない

と思ひながら返答をした

紫「なるほどねーそれは良い事ね

お小遣いくらいならあげられるわよ」

セト「本当ですか！ありがとうございます！」

紫「妙に食い付きが良いわね」

まあいいわはいこれ」



と紫さんは苦笑いしながらお金をくれた

少し素直になりすぎたか

セト「ありがとうございます

これなら何とか暮らせそうです」

紫「あんまり人に頼つても駄目よ

働く所を探してるなら文辺りに聞いてみたら

あの子色々情報持つてるし」

セト「ですよね」

分かりました

今日会う事になってるので聞いてみます」

紫「あら、随分と仲良くなったのね」

「可愛いわ、それじゃ頑張つてね！」

良い幻想ライフを」

セト「はい、ありがとうございます」

そう言い終わると紫さんは

空間の中に消えていった

最後のセリフ、なんだったんだろ

新しく入ってきた人には言ってるのかな

いつの間にかカラス達は起きていた

鳥123 「おはよう」

セト「うわ、お前らすごい重なつたな」

こいつらも相変わらずだ

カラス達の頭を撫でてやると

もう一度眠そうに目を閉じる

全く可愛い奴らだ

そうしているとふと思い出した

セト「あ、角洗ってねえ」

元の世界ではずっと忘れていた事だった

久しぶりに角の手入れが出来るということで

ルンルン気分です川に向かう

キュッキュと角を洗っている中

何気なく里の方を見る

セト「ん……なんだあれ」

よく目を凝らすと

里の道を砂煙をあげながら何かが迫ってくる

何事かと角を拭きながら立ち上がる

それはまつすぐこつちに向かって来ていた

セト「なんだあれ…やばくねえか？」

ドドドドという地響きを

体で感じる

このままでは家が壊されるかもしれない

セト「それはまずい…そうだ！」

遠い昔の記憶…

母が俺に教えてくれた魔法…！

空間に物をしまい込める便利なやつ！

その中にもしもの時になってしまっておいた父の愛用していたハンマーがあったはず

！

セト「ええつとええつとく、

どこだ…

あ、あつた！」

空間から引つ張り出したそれは

両手で持つのもやっと、殺傷する為にデザインされたような形をした重く鈍く輝くハンマーだった。

柄には紋様のようなものが刻まれている。

石突の部分には返した刃がぎりりと顔を覗かせている。

その不気味な姿に身を震わせたが

怪物が目の前まで迫っている事に気付き

構える。

怪物は泥の塊のような姿をしていた

大きく重そうに見える体躯とは裏腹に

物凄いスピードで迫ってくる！

セト「…今だ！」

叫び、武器を振るう

ハンマーは確かに怪物に向かって真っ直ぐ振るわれた

しかし…

ドリユ…

余りに手応えのない感触に

バランスを崩した。

怪物は進行を止めていた。

セト「…止まった…？」

そう言った矢先

ぐわつという音と共に光が消えた。

いや、怪物に包まれた…？

何が起こったと思考を巡らせる前に

息が出来ないことを悟る

セト（これは…やばい！）

息のできない恐怖と

周りの状況が掴めない恐怖に同時に襲われた

次第に目の前が暗くなっていく…

??? 「うわ、やったと思ったんだけどなあ

どっかいつちやつたし…」

戦闘、と呼ぶには余りにあつけない戦いを

見てる者が居た。

その者は怪物が地面に潜っていく様を  
何も出来ずに見ていた：

文「こ、これは！早朝を襲った悲劇！

スクープの匂いを感じてきてみたら！

なんですかこの状況！すごい砂煙です！

ですが：あまり被害はなさそうですね

残念ですねえ何かネタになると思ってたんですが：」

と文は空中でブツブツと言っていた

文「そうだ！セトさんなら何かあるかもしれません！

セトさーんお邪魔しますよー！

つてあれ？」

そこにはセトの姿はなく

ただ、

鳥123 「「あやーーー」」

と3匹のカラスが居るだけだった

文「ど、どうしたんですか3匹とも!

セトさんはどうしたんですか!?

鳥1「つれてかれちやったー!」

鳥2「どろー!」

鳥3「セトしぬー!」

とかなりのパニック状態だった

しかし

文「ちょ、ちょっと待ってください

泥に連れていかれた…?セトさんが?

これは…かなりのスクープです!」

ニカツと笑うや否や文は

猛スピードでどこかへ行ってしまった

鳥123「あ、置いてかないでー!」

という鳥達の悲痛な叫びは文には届かなかった

文「…とと、記事にする前にセトさんの体が心配ですね…

そうだ!」

文「もーみじー」

??? 「はあくまーた面倒事ですか…」

いやいやながらも声をした方向を見る

白い髪の毛、白いしっぽ、白い耳が生え

立派な盾と剣を備え、犬と人を合わせたような

見た目をした少女が木の枝に立っていた

??? 「犬じゃないです！狼です！

正確には白狼天狗！」

おつと…

文「どうしたんですか1人で喋って」

??? 「いえ、ちよつと」

文「はあ、そうですか

そうだ！ 椀に頼みたい事があります！

人を探してほしいのです！」

椀、と呼ばれた少女はまたもや嫌な顔をした

椀「なーんで仕事外の事をしなきゃいけないんですか！



私達白狼天狗は妖怪の山の監視をしなきゃいけないんですよ!?

そんな事は分かっているはずでしょ!

全く文さんは昔っから…」

ぶつぶつと愚痴を並べる椀。

そんな事などおかまいなしに

文「良いじゃないですか椀と私の仲じゃないですか

それにすぐ済みますよ

あなたの能力でちよちよーつと、ね?」

椀「…はあゝ

分かりましたよ…1つ貸しですからね

で、誰を探すんですか」

よし、とガッツポーズをして

文は椀にセトの特徴を教えた

椀「烏天狗と悪魔の…はあゝ

あなたも変な人と知り合いましたね」

文「セトさんは良い人です

少なくとも悪い人ではありません!」

自信満々で語る文を尻目に

椛は早く終わってほしい思いで能力を使った

彼女の能力は千里先まで見通す程度の能力である

椛「……む」

文「何か分かりました？」

木の枝に座って足をぶらぶらさせながら

文は聞いた

椛「…何も…」

ただ魔法の森に結界が張ってあるところがありました

そこは文さんでも入れないですよ

恐らく、居るとしたらそこかと

まあ、こうなると帰ってくるまで何も出来ませんね」

文「…そう…ですか」

少し暗い顔になりながら文は立ち上がった

椛「私に出来ることはここまでですね

…では仕事に戻ります

きつとセトさんは大丈夫ですよ」

そう言つて椛は背を向け監視の仕事に戻つた

文はとりあえずこの記事だけは新聞にしよう

と仕事場に戻ろうと空へ飛んだ

その道中：

紫「あらゝ元気ないわね文

今日はセトちゃんとお出かけじゃないの？」

と紫が空間から現れた

文「それが、何かに連れていかれたみたいで

安否を確認しようと思つたのですが

わからずじまいで：」

紫「あらあらそんな事がねえ

まあセトちゃんは死んではいないから安心してね」

文「はい…、!?」

ちよ、それはどういう」

と質問しようとしたが紫はその時には消えていた

だがセトが死んでいないという言葉は

あの紫から放たれた言葉だが何故か信じられた

その頃…

セト「ごっほごっほ！

おえ…ぬー土が口に…」

ここは…どこだ…

## 第六話 もう1人の

セト「うえ…じやりじやりする…」

ぺっぺつと唾を吐き

状況を確認する

何か建物らしきものの中に居るようだ

壁も床も石で出来ている

天井には窓がついていた

大きな葉、隙間から射す木漏れ日、まだ明るいはずの空は見えずただ薄暗いだけ

冷たい。明かりがない。不気味だ。

だが1つ分かったことがある

ここは2階のようだ。部屋の正面に窓があり

そこから下を見ると少し遠くに地面が見えた

少なくとも1階の高さじゃない。

部屋を探索していると1階に続く階段を見つけた。

1階にはキッチンにテーブル、薬品のようなものが沢山陳列してある棚に見た事もな

## い機械

ここの主は研究者…？

と、心配を感じ振り返る

そこには、

セト「うああ！でた！怪物!!」

里で出会った泥の塊のような容姿をした怪物

しかし、様子がおかしい

セト「動かない…？」

触つてみると怪物は粘土質な見た目をしたままガチガチに固まっていた

セト「へ、へへこうしてみると結構可愛いな…」

この状況の中、見た事あるものに安心してしまっていたのかそのような言葉がでた

ギイイ…

!!

ドアが開いた…

???「おやおやあ！お客様でえすかあ？」

彼？彼女？どちらともつかない声が部屋に響く

セト（バレた…一瞬でバレた…）

??? 「そこにいるんですね？ネズミイ!!」

ぐあぁっという風切り音と共に顔が目の前まで来た  
フードを被っていて口しか見えない

ニヤリと笑った不気味な口しか

胸ぐらを捕まれやすやすと持ち上げられた

??? 「悪魔の家に泥棒とは、いい覚悟してんなあ！」

セト 「ちよちよつとまつ…うわあ!!」

放り投げられ壁にぶつかる

パラパラと砂煙が落ちてきた

セト 「ゲホツゴホツまつでぐださい…オエ…

俺は…気づいたらここにいて…」

??? 「ええー？何それえ？そんな冗談通じる…ん？

ちよつとまつて顔見せてえ？」

不思議な人だ

声色がどんどん変わる

カチツと明かりをつける音がした

フードを外しばちくりとこちらを見る

??? 「……あああああー！！！！やっぱりいい！！」

セト 「……？」

………かくかくしかじか………鳩ぼつぽー………

セト 「はあああ!?!?なんでそんな……! ああくそつ！」

??? 「ごめんねえ今治してあげるから

晩飯も食べてってよ君と話がしたいんだ」

魔法陣のようなものを空中に書いたと思つたら

さつきまでの痛みが嘘のように消えていた

セト 「……で?なんであの怪物使つて俺を誘拐した上

あんな暴力までしたの？」

落ち着いて聞いてみた

??? 「そりや帰つてきて部屋に人いたら怖いじゃん! 悪魔的なもん見せつけて追い出そ

うとするじゃん！」

むふーと鼻息を荒くした

セト 「知らないよ! そんな事!



てかなんで怪物に命令させておいて忘れるの！馬鹿なの！しぬの！！」

??? 「し、死なないよお…ただ昔っから忘れっぼいんだ…ほんとごめんねえ」  
小さくなるこの子を見てると本当に悪気はないようだった。

セト 「はあくまあそれは良いとしてなんで俺なの？」

??? 「そりやあ！君も悪魔だからね！」

セト 「……………ほお」

??? 「ほら、幻想郷って悪魔ほとんどいないじゃない？友達が欲しかったんだよお！同じ種族の！」

セト（悪魔あんまりいないんだ…）

??? 「そんな時だよお！新聞で君を見たのは！

衝撃だった！こんな出会いがあるなんて！」

バンつと机を叩き

ずいっと身を乗り出して顔を近づけてきた

急に近づいて来たので反射的に顔を背ける

??? 「…あ、僕が男の子か女の子か分からないから動揺してるんでしょーかーわいー」

ニヤニヤと笑いながらこちら見てくる

セト 「べべべつにそんなこことななななな」

??? 「……あからさま……」

セト「バレたか……」

??? 「はあ、つまらないなあ、あたまたに僕を女の子だと思つて襲う人もいるのに……お察しの通り僕は男」

名前はヨルトつて言うんだ」

セト（ヨーグルトみたいだ）

ヨルト「ヨーグルトじゃないよ」

ジト目でこちらを睨んできた

セト「は、はは、あ、おれの名前言つてなかつたね」

ヨルト「セトでしょ？ 知ってるよ新聞に書いてたもんだから」

セト「なんかセトとヨルトつて名前似てるな！」

ヨルト「…晩飯作つてくるね」

セト（掴みどころねえなあ）

そこからヨルトとは色んな話をした

ヨルトは魂の研究？ をしている事

両親は魔力を使つて次元旅行している事

今日は人里で安売りをしていた事

それと…友達がない事

ヨルトと話していて分かったがまず掴みどころがない

まあヨルト自身自覚があるらしく生物の魂を取り扱っているとこんな風になってし

まうのだそう

ヨルト自身は楽しそうだ

それにとでも話しやすかった

ここの家は魔法の森という場所に立っているらしく

あまり人が来ないという

更に家の周りには結界が張ってあるそうだ

なんでも魔法の森は危険だから、らしい

セト「美味しかった！ありがとうな！」

ヨルト「はあーい君と話していても楽しかったよ！」

ヨルトは屈託の無い笑みを浮かべながらそう言った

しかしヨルトは急に暗い顔になり

おずおずとこちらを見ながら

ヨルト「ねえ！君の魂を見せてくれない!？」

セト「…はあ!?!なんだよそれ！殺すのか!?!」

急に不可解な事を言われパニックになる

ヨルト「ああ違う違う、ただ君の魂のコピーを使って研究したいんだ、君と話してて興味をもったんだよ

そう、君の、深層心理！可能性！君はどんな人なのか！ああ！考えるだけでたまらないねえ！くくく…」

そう言った彼の笑みは本来彼が悪魔だという事を思い出させてくれたようだった

セト（ああ、ほんとにこいつは、おかしな奴だ）

だがそう思ったセトの顔はまるで安心しきったかのような穏やかな表情をしていた

## 第七話 魂

動けない

今は椅子に座って

左腕を机に上げてる状態だ

左腕の手首に何か書かれている

なんだこの状況は

かれこれ何分この体勢なんだ

きつい

セト「ねえ」

ヨルト「喋らないで、ブレる」

セト「ごめ…」

ヨルト「喋るな」

ひい〜怖いよ〜

これが研究者かよマジじゃんマジマジじゃん

さっきまでのニコニコえへへのヨルト君はどこに行ったの!?

たまにふうふうっていうため息やめてください  
くすぐりたいです

そんな事をずつと考えていると

左手首から何か出てきた

青白くほのかに輝くそれをヨルトは引き上げているようだった

なんか、力抜ける

ヨルト「よーし、ほいー！」

と素早い動作でヨルトは小瓶にそれを入れた

ヨルト「はい、おつかれくしばらくは倦怠感に襲われるはずだから休んでよ」

いつものヨルトに戻っていた

セト「あくそれがく魂？」

言われたように確かにだるかった

そんな中質問をした

ヨルト「コピーだね

魂のコピーは応用すれば命だつて吹き込める

君を誘拐したあの泥ちゃんみたいだね」

と泥の塊を指さした

セト「便利なくもん、だなあ」

そういうとヨルトはへへへと照れくさそうに笑い奥の部屋に入っていたと思つたらすぐに出てきた

セト「あれ？研究はしなくていいのか？」

と聞いたが彼は少し笑つたあと

ヨルト「…友達が居るのに研究するわけにもいかないでしょ？」

と友達、というフレーズが恥ずかしかったのか

少し溜めたあとにそう言つた

その後はだるい体を心配してくれたり

里の事などを話したりした

文については少し知っているようだった

なんでも人里によく居るんだとか

そこで取材をよくしてると言うので

少し興味が湧いた

風呂も入れてもらった

久々に入ったのでとても気持ちのいいものだった

そんなこんなですっかり夜もふけた頃

今夜は泊まって欲しいと言ったので甘える事にした

石畳の床で少し寝ずらかったが

ヨルトと話しているうちにいつの間にか寝てしまっていた

そして、朝

いつもなら朝日に顔をしかめ

だるい体を無理矢理起こす所から始めるが

ここは魔法の森

朝日も射さない暗闇の森

全く朝という感覚がない

不思議な感覚だった

睡眠に比べればそんなものどうでもよかった

ああこのまま2度寝：

ヨルト「起きろおおおおお!!!」

セト「ぎやああああ!!!」

横を見るとヨルトはニコニコと笑っていた

ヨルト「起きた？」

セト「心臓発作起こすわ!!」



こうして朝が始まった

朝ごはんもヨルトが作ってくれた

全く何から何まで嬉しい限りだ

それに美味い！

今度教えてもらおう

ヨルト「僕の料理なら教えてあげられるけど？」

セト「お前、超能力者か？」

ヨルト「悪魔です」

へへつと笑うその奥に恐怖を少し感じたが

それは気にしないでおいた

ヨルト「それじゃ少しだけ教えてあげよう

頭の中に直接ね、ほいっと」

ぱぱぱと空中に魔法陣を描き

何か飛ばした

それはするくとセトの頭に入っていった

セト「あくなんかきた」

料理を教えられた実感はないが何か送られた事は確かなようだった

ヨルト「ふふふ、不思議でしょ？まあ君も恐らく出来ることだよ  
これくらいなら悪魔なら使える

それに君は混血だ色んな可能性を秘めている」

セト「魔法なんてそうそう使わねえよ？」

と言ったがヨルトはさあーどうだろうねと言っただけだった

そして

ヨルト「それじゃ君ともそろそろお別れだね

流石に里の人が心配してるんじゃない？」

あー確かに

すっかり忘れていた

それほどまでにヨルトとの時間は楽しいものだった

魔法の森は危険だから途中までは送ってくれるそうだ

その帰り道も変わらずヨルトは色んな事を話してくれた

ここに住んでいる魔法使いの話もした

こんな所に人間も住んでいる事も

そして遂に

ヨルト「それじゃまたね

この先を進めば妖怪の山に入っていけるはずだ  
楽しかったよ」

少し寂しそうにそう言った後

すぐに後ろを向いた

セト「俺も！楽しかった！また会おうな」

ヨルトは振り返りながら嬉しそうに笑った

そしてセトとヨルトは別々の道を歩んだ

妖怪の山に入り

自分の家を探そうと思ったがなんせでかい山なので忘れてしまった

仕方なく一番わかりやすい天魔様の城から辿るように家に帰った

セト「あああああ〜でけえよ山あ」

玄関に入りすぐにどさりと倒れ込む

するとバサバサつと羽音が聞こえた

鳥達「セトおおおおお!!!」

と3匹一斉に飛んできた

おーよしよしと頭を撫でてやると

落ち着いて静かに身を擦り寄ってきた

玄関でそんな事をしてしていると奥から足音が聞こえた

1歩、2歩、

誰だ…

…緊張感が走る…

文「セトさん！いつ帰ったんですか！」

そこに居たのは文だった

文は走りながらこつちまできて色々質問を投げかけた

だが玄関で話すのはよそうと

居間に誘導した

文「すみません急に質問をして

連れていかれたって聞いたものですから

でも良かった、無事に帰ってきて」

文は暗い顔をしながらそう言った

本当に心配をかけたようで

悪い気がしたと同時にそんな事を言われ少し恥ずかしかった

文「そうだ、セトさん！お酒飲めますか？」

急にそんな事を言ってきて驚いたが

セト「ええ、好きです」

と素直に応じた

元々酒は大好きだった

文「それじゃ今日は無事に帰ってこれたお祝いも兼ねて2人で飲みましょう」  
久々に酒が飲めるという事で二つ返事をした

そして夜、

文とセトは2人で飲みながら

誘拐された後の事を沢山聞かれ

そして他愛ない話をし楽しく過ごした

そして何事もなく終わり

文は新聞の記事の1つにすると行って

帰ってしまった

そう、何事も…なく…!くう…!!

セトは久々に楽しく酒を飲んだ疲れで

泥のように眠った

その頃…研究室では

ヨルト「ああ〜やっぱりかなりの魔力持ってるんだ

流石混血、常識ぶち破ってるねえ

そのうち弾幕とかで遊べたりするかなあ

楽しみだなあ…

ん、なんだろうこの記憶…

…おおつと…これは…：まずいねえ…」

そう言つて彼は冷や汗を静かに垂らした

朝…

鳥のさえずりと容赦なく照りつける朝日

そしてドアを叩く音で目が覚めた

重い体を引きずりながら玄関に立ちドアを開ける

そこには赤毛を1つ結びにし

ワイルドな服を着た烏天狗の女性が笑いながら立っていた

???「よお！大変だったなあ！

昨日帰ってきたみたいだから寄つてみたんだ

今、ちよつといいか？」

セト「あーはい、なんでしようか」

???「へへ、そんな固くなんなくていいのによお

まあいい、お前の戦いを見てた者だ  
いやー良い筋してるなあと思ってるね  
そこでだお前に聞きたいことがある

お前、戦闘部隊に入らないか？ れっきとした仕事だし金も入るぞ？ ん？ どうだ？」

## 第八話 戦闘部隊

朝、いつにも増して重くのしかかる

寝癖で頭に少しの違和感がある

毎度毎度おまけされるこのだるい体

取れきれてない疲れと

昨日の酒の余韻が程よく絡みあう

こんな朝には四肢を投げ出して二度寝でもしたいのだが

よくもまあそんな時間から物騒な話があがるもんだ

??? 「なーにぼーっとしてんだい

聞いているのか？」

目の前にいる女性

朝から意味不明な事を言っている

寝ぼけているのか

セト「…ちよっと話についていけないんですけど…」

愛想笑いで答えてみる



??? 「はあく、じゃ！簡潔に言うぞ？

私はお前の腕を見込んで戦闘部隊に入りたい

答えはまだ待ってやる

私の家はここ降りて角曲がった所だ

以上！質問は」

と早口で言う

無論朝早くからこんな事言われ

ついていけるはずもなく

セト「えつとく…」

と言ったきり黙ってしまった

??? 「…、よしもういい

ちなみに私の名前はアカネだ

答え、待ってるぞ」

と言ってピシヤンとドアを閉め足早に帰っていった

セト「具体的な事…聞いてなかったなあ…」

ぼつりと呟いた後自室に戻り

寝転がる

戦闘部隊ってなんだ？何するんだ？

あの女性は何者？腹が減ったなあ、

などと思考にふけつていと

コンコン、とまた玄関の方でノックがした

何故か今日は客人が多いらしい

ガララと開けると目の前には文がいた

相変わらず可愛い笑顔を浮かべながら

セト「文さんじゃないですかどうしました？」

文「いえ、まだ幻想郷に来て日も浅いあなたの事ですから朝ごはんとか食べてないん

だらうな」と

それに人里に行く約束果たせてなかったので、今行けます？」

少し首を傾けながら聞いてくる彼女は

とても可愛らしく、目を奪われてしまった

セト「…ああ、はい行けますよ」

文「あややあ？さっきの間はなんですかあ？」

とジト目で聞いてきた

なんでもないと焦りながら否定したが

彼女には通用してないようだった

すぐに支度を済ませ

外に出る

烏達は留守番をするようだ

成長を感じられたと言えば何様だとあいつらに言われそうだが：

穏やかな時間が流れる空での移動

時折吹く風が気持ちよく頬を撫でる

移動の最中、文さんは俺と人里に行くことを楽しみにしていたという事を知った

いつからだろう

誰かが自分を待っていてくれるという事が無くなったのは

いつからだろう

人と話す事に恐怖を覚え始めたのは

幻想郷は生きる感覚をすぐに取り戻させてくれた

そう、ここはもう自分の居場所になりつつあった

疎まれずただ受け入れてくれる

ここはそういう場所なのかもしれない

そんな事を考えていると

人里らしきものが見えてきた

最初は人が自分を認識している事に違和感があったが  
それもすぐに慣れた

近くにうどん屋があつたので

中に入った

威勢の良い声と

皆の笑い声が響く賑やかな店だつた

そこで文さんと一緒にうどんを食べ

店を後にする

外は店よりも涼しかったが

あの暑さが恋しく感じた

道中文さんは急に顔を覗き込んできて

文「悩み事ですか？

戦闘部隊に誘われたみたいな顔をしていますね」

驚いた

ただ目を見張っていると

文「あはは、凶星ですか

この文様に分からないことなんてありません」

全くなんでこうも皆自分の思考を読んでしまうのか  
顔に出やすい？うっそだー

セト「その通りですよ

朝アカネという人に誘われたんです

具体的に何をするかはまだ聞いてないですけど」

と朝の事を話した

文「そうだったんですねえ

いやはや勘が鈍ってなくて良かったです

それにしても、戦闘部隊ですか

懐かしいです」

と文は遠い目をした

文「今は私は諜報部隊として活動してますが

こう見えて昔は戦闘部隊だったんですよ？

あの頃は、思い出したくもありませんね」

どれほど辛いことがあったのだろう

想像を絶する事は確かなようだった

文「まあ今は幻想郷も平和ですし

山の戦闘部隊は禍という存在と戦ってるみたいですが

平和そうな妖怪の山ですが

奥地では戦闘部隊が戦ってるわけですね

禍は白狼天狗達では手に負えないので」

そうだと文は続けた

文「いずれは弾幕勝負もするかもしれませんが

戦闘部隊ならあまり使わないでしょうけど

弾幕というのは、ようはお遊びですね

急に仕掛けられるのはよくある事です

覚えてて損はないと思います

まあいざれにしろ私は止めません

戦闘部隊も良い選択だとは思いますがよ」

そう言つて文は長話でしたねと笑つた

彼女にしては少しぎこちなく

寂しげに

：しばらく談笑しながら歩いていると神社が見えた

長い長い階段の上に立派な鳥居が建つてある

文は霊夢に挨拶に行つた方が良いと言つた

霊夢つて誰だ

そんな些細な疑問は口に出さなかつた

いずれは分かる事だ

階段は登らず飛んで鳥居をくぐる

そこには立派な鳥居とは裏腹に

小さい神社がポツンとあるだけだつた

人が居る気配はしない

階段下では活気があふれ賑やかな人里が見えた

それが別世界に感じるほど人がいない

文「さあ、行きましょうか」

セト「は、はい」

歩く、歩いて歩いてやつと賽銭箱の前まできた

無駄に長いなあ

そう思いながらせつかくだしと

財布からお金を取り出し

投げ入れる

それと同時に文が「霊夢さーん」と叫んだ

賽銭箱の中に当たったと同時にか

もしくはそれより早くか

目の前の障子が思い切り開かれ

巫女服のようなものを着た少女がせんべいをバリイと

噛み砕きながら現れた



## 第九話 博麗の巫女

文と人里を回った昼下がりに。

神社に行く事になった。

眼下にある長い階段を無視し、飛んだ。

賽銭箱の目の前まで来て辺りを見回す。

神社の周りには囲うように木が生え、ざわざわと揺れ動いていて、あとには風の通る音、そして小銭を投げ入れる音が異質に鳴り響いた。

その静寂を破ったのは、障子が柱に当たる音とせんべいの割れる音。

目の前には巫女服のようなものを着た少女。

文は霊夢さんと呼んでいた。

何者だこの子は。

霊夢「い、今、小銭入れた？入れたよね!？」

せんべいのカスを口に付けながら、興奮冷めやらぬ様子でグイグイと近付いて来た。

セト「は、はい入れましたけど…」

もしかして何か良からぬ事をしてしまったのか

不安が募ったがそんなものはすぐに崩れた。

霊夢「ありがとうく!!最近参拝客も居なくて困ってたのよ!これで少しはもつわ」

感謝の言葉を言われ胸をなでおろす

と同時に賽銭で生活しているのかこの人は。という疑問が沸いた。

霊夢「それであなたは…見た事ない顔ね…」

急に霊夢さんの顔にくらい影が降りる

警戒している顔だ。

なんとか説明しようと口を開いた時

文「この方はセトと言います

最近幻想入りしてきて

今は妖怪の山にある里で住んでいます

今日は一緒に人里を回っているんですよ」

と文さんが笑いながら言ってくれた

その横顔を見て自然と笑みが零れる。

霊夢「はあくまた幻想入りした人ね

…この場合妖怪?だけど

まあ面倒を起さなければいいわ」

ていうかあの山つて里とかあつたんだ

と霊夢さんがポツリと呟く

それを聞いた文さんは

失礼ですねと口を膨らませた

霊夢さんはそれを横目で受け流しながら

苦笑いをし

霊夢「それで？結局なんの用？

用がないなら中入りしたいんだけど」

とサラリと言った

そうだ、文さんは何故ここに連れてきたんだろう

文「そりやもちろん取材ですよ

おまけのセトさんです」

案の定取材か

：っっておまけて！

無意識に叫んでいた

文「あやや、言い方が悪かったですね」

と意地悪そうに笑った

霊夢「ふふ、分かったわよ

あなたの事だからどうせそこら辺の話だと思っただわ

その子にも賽銭を貰ったし」

どこか機嫌が良さそうだった

文「それでは中に入りますよう」

なんであんたが促すんだよと霊夢は文に突っ込む

仲が良いなとその様子をセトは見ている

ここに来た時に感じた寂しさとは真逆の温かさを感じた

神社の中はとて古かったが、

掃除などはしつかりされていてとても綺麗だった。

自分の家とは大違いだ。

こういうのを見ると自分の家も掃除をしなくてはこの使命感到驅られてしまう。

出された座布団の上に座ったが落ち着かない。

無意識に視線は障子の外に向けられていた。

後ろでは文と霊夢が色んな話をしている。

たまに自分の名前が出てくるのが少しむず痒かったが、

気にせず以外の景色を眺めていた。

本当に何も無い所だったがそれが逆に淋しさを演出していて落ち着いた雰囲気だった。

しばらく眺めていると

どう見ても落ち着きのない軌道を描きながら飛んでくるものが目に映った。

セト「……なんだあれ……」

それはみるみるうちに近づいてきて神社の前で止まった。

人だ。しかも箒に乗っている。魔法使いというイメージを具現化したような格好をしている女の子だった。

??? 「よおー！ 霊夢！」

私が来たぞー！」

霊夢さんを知っているようだった。

霊夢さんはその声に気づき

少し口を緩めた後

すぐにいつもの顔に戻り

やれやれと外に出て行った。

すぐに霊夢さんは戻ってきた。

その後ろを先程霊夢さんの名を呼んでいた人が着いてきた。

??? 「ん？ おお！ お前！ 知ってるぞ！

名前なんて言ったっけ？ やかん？

面白い角だな！」

目を輝かせながらぐいぐいと詰め寄ってきた。

やかんという言葉に少し笑ってしまった

こういう楽しい人は好きだ

セト「やかんでは無いですよ笑

セトと言います

この角は遺伝ですね」

軽く自己紹介をしたが相手は

??? 「なんだよ〜かたつくるしいなあ〜」

と苦笑いをした

??? 「セトか！ あたしは魔理沙って言うんだ

マリちゃんって呼んでくれてもいいんだぜ！」

そう言った後、にししと笑った。

セト「よろしくお願いします

マリちゃん」

と少しイタズラのつもりで呼んでみた。  
すると

魔理沙「ばっ！今のはほんの冗談だろ！

ほ、本当に言うやつが居るか！」

と顔を赤らめながら叫んだ。

霊夢さんも文さんも笑っていた

予想以上の反応をしたとセトは満足していた。

そう思ったのも束の間

魔理沙さんはプルプルと震えながら

魔理沙「やられっぱなしは性にあわない…

セト！弾幕で勝負しろ！」

急な出来事で一瞬処理が出来なかった。

そういえば文さんが弾幕勝負がどうか言っていたな。

でも俺はまだ弾幕というものをやった事がない。

セト「あの、俺まだ弾幕やった事ないんですけど…」

とおずおずと聞いてみると

魔理沙「うるさい！ だったら黙ってやられる！」  
と聞く耳を持たなかった。

霊夢さんはやるなら外でやりなさいよ。と

文さんは取材しなければ。と

周りの雰囲気です避けられるはずもなく

外に来てしまった。

魔理沙「よし！ 始めだ！」

心の準備が整う前に魔理沙さんはそう言い放った。

一気に自分へ向かう光の玉が発射された。

避けなければいけないと本能が叫んでいた。

なんとか全て避けきった後に

魔理沙「へっ！ どうした！」

何もしないと勝てないよ！」

と魔理沙さんが煽ってくる。

悔しかったが何も出来なかった。

何か、何か出来ないか？

そう思いながら魔理沙さんに向かって手を伸ばす



指先に神経を集中させる。

すると、

シユン

という風切り音と共に何かが発射された。

セト「あ、なんか出た」

瞬間、目の前まで迫っていた光の玉に直撃し目の前が光に包まれた。

## 第十話 陽は沈む

セト「うおおおあ!!」

物凄い勢いで起き上がってしまった  
そりやそうだ

あんな光るものが顔面に当たったら  
誰だって驚く

…多分

あれ？起き上がる？…てことは

魔理沙「よお！起きたか！

へへっ馬鹿に元氣そうだな！」

少し遠くの方で文達と会話をしてた

魔理沙がこちらに気づいた

やはりまた気絶したのか

こっちに來てから気絶する回数が多くないか

魔理沙「おい！無視するなよ！

可憐な美少女がお前に声をかけてるんだぞ」

と半ば冗談で魔理沙はにししと笑う

セト「誰のせいでこうなったと思ってるんですか！」

と未だ地面に尻を付けたまま

上半身で表現出来る限りの怒りを示した

その様子を見て魔理沙の笑い声が一段と大きくなる

魔理沙「あはははははは！

わりいわりいまさかあんなに綺麗に当たるとは思わなくてな！

にしてもお前の弾幕も凄かったぞ！

弾幕と言うより弾だがな！はははは！」

セト「弾……？」

そんなことを言われ

立ち上がりながら

ふと記憶を巡らせる

……そんなもの撃った覚えが……

あああれか

気絶する直前に出たやつか

という程度には思い出した

それと同時に

魔理沙「すげー速かったんだぞ

バビューンって感じで！

おかげでほら！帽子に穴空いちまった

ヒヤツとしたぜ！」

そう言つて魔理沙は空いた穴を何故か得意げに見せてきた

セトは最初まさか、と思つて話を聞いていたが

空いた穴を見せられると信じるしかなかった

魔理沙「お前、鍛えれば強くなるぞ！

私が教えてやつてもいいぜ！

お前どこ住んでんだ！」

と言われ少し考えた

何せこの魔理沙さんのことだから教えるのが下手に見えたからだ

霊夢「この子は妖怪の山に住んでるのよ

あんたが軽い気持ちで許可なく入れる所じやないわ

それとセト、魔理沙はこう見えて教えるのは結構上手いわ」

話に入ってきた霊夢が淡々と言う

そうだ、俺の住んでる所は結構警備がかたいんだつた

最初の頃に毛玉くん（そう呼んでいる）に襲われたのを思い出し、うんうんと頷いた  
それと同時に真顔で魔理沙さんは教えるのが上手いと聞いて冗談ではなさそうだと感じた

魔理沙「ちえーお前あんな面倒くさそうな所に住んでるのか

大変だなく」

文「面倒くさそうな所とはなんですかー！

同情するならネタをくれ」

なんだそれと魔理沙が笑い

皆が笑い出した

時刻は夕方

セトの腹が鳴る

魔理沙「つと、そろそろ晩飯時だな

セト、私は魔法の森に住んでるから

弾幕教えて欲しけりや来いよ」

箒に跨りながら魔理沙は言った

魔法の森と聞いてセトには思い当たる節があった

セト「あ、そこってヨルトがいる所ですよね！

ちよつと知ってます！」

魔理沙「ヨルト？誰だそりゃ」

と、魔理沙は怪訝な顔をした

魔理沙「私は魔法の森に長く住んでるが

そんな名前のやつは知らないなあ」

顎に手を当てながら魔理沙はそう答えた

ヨルトの事だから何か結界的なものを張っているのか

そう思ったが深くは考えなかった

セト「そうですか：

まあ魔法の森の場所は大体分かっています

俺はこつちに来てからあまり時間が経ってないので

すぐに行けるとは限りませんが」

そう言うと

霊夢「魔理沙、あんた魔法の森に居る時よりここか

香霖堂に居る事が多いじゃない

この神社に来た方が早いわ

私は出掛ける事なんてそうそうないんだし」

魔理沙「確かにそうだな

こっちいる方が多いや

じゃあセト、そういうわけだから暇あったらここ来いよ」

そう言うと

霊夢「私の神社なんだけど」

と霊夢は即座に突っ込んだ

魔理沙はへへつと笑った後に

それじゃ私はそろそろ行くぜ

と言い物凄いスピードで帰っていった

霊夢「全く、せっかちなんだから」

魔理沙の後ろ姿を見つめながら霊夢は呟いた

あんた達はどすするの？

と聞かれたセト達は少し話したあとすぐ帰る事にした

くくくく

文「それにしても

まさか弾幕勝負するとは思いませんでした

おかげでいい写真が撮れましたけどね」

ウインクしながらこう言ってきた文さんに

少しドキツとした

セト「ほんとそうですよ

少しからかっただけなのに：

ていうかいつの間に撮ったんですか」

と聞いたが

思えば撮る隙なんていくらでもあった

すると文はカメラを掲げながら

文「私に撮れないものはありません！

セトさんのレーザーのような弾幕もしっかり写ってます！」

と自慢げに言った

是非見てみたいがまだ現像をしてないので見れないと言った

あと、と文は付け足し

文「私はそろそろ妖怪の山に帰りますが

セトさんはこのまま人里を回りますか？」



そう聞かれ

セト「ええ、食材も買わなきゃいけないので

紫さんがお小遣いくれたんですよ」

そうなんです、気を付けてと言われ文は

そのまま帰っていった

くくくく

ヨルトに教わった（というか送りこまれた）ものを作るため

適当に食材を買っていく

店の元気なおじちゃんおばちゃん

楽しげに戯れる子供達

夕日が里や人を真っ赤に染め、

もうすぐ日が沈み夜が来ようとしていた

こうやって人を眺めるのは初めての経験だった

あつちの世界では人との触れ合いなんて全く無かったのだ

皆温かくとても居心地が良かった

両手に食材の袋を持ち

空を飛んでいた

風が心地よく吹き髪をなびかせた

途中、山の木の枝に座り

沈みゆく夕日を見ていた

ああ、なんて寂しげなのだろうか

夕日を見てこんな事を思った

何故寂しく感じるのか

今日が終わる事に対してか

明日が来る事に対してか

今の場合は前者だろうか

山の奥の方では忙しくなく毛玉くん達が動く気配を感じた

今日も頑張っているんだなあ

そうしみじみしていると

後ろから

??? 「おい、お前」

と声をかけられた

見ると毛玉くんによく似た女の子が立っていた  
??? 「ああ、なんだセトとはお前の事だったのか

その角は特徴的だからな、ははは」

自分の名前を知っているようだった

君は？

と聞くと

椀 「私は犬走椀だ

この山の哨戒班の一隊長を務めている

君の話は文さんから少し聞いていた

もうすぐ夜になる

禍が来るぞ」

禍、文さんが話していた戦闘部隊が敵対している存在

まだ見た事はないが白狼天狗では手に負えないのでは

そう思ったが椀さんは続けた

椀 「禍達は私共では手に負えないが、

足止めくらいは出来るさ

弱い個体なら殺せる」

殺す、

その言葉が今まで平和に生きてきた者としては

心に突き刺さった

増してやこの幻想郷での話だ

椀「君は戦えないだろう

早く自分の家に戻って

その食材で美味しい飯でも食ってくれ

この山は私達と戦闘部隊が守るから」

それと

帰る時は高く飛べよ

と付け足し

そのまますいすいと枝から枝へ飛び移って行ってしまった

セト「なんか、怖いな」

心にとどめておけず

ふいに口から漏れた言葉

しばらくそのまま固まってしまった

セト「そうだ、帰らなきゃ」

陽はすっかり落ち

辺りは暗くなっていた

高く飛ぶ高く飛ぶと

心に訴えながら帰り道を飛んでいた

奥の方では何かの叫び声のような

うなりのようなものが聞こえる

これが禍の声か

そう思った瞬間

葉の隙間から何かが見えた

真つ黒くドロドロした表皮

赤い目玉

それはこちらを見たまま悔しそうに奥の方に走っていった

あのまま普通に飛んでたら何されるか分からないな

鳴り止まない心臓の音を聞きながら

何とか家に着いた

里はいつも通りの空気

烏達も待つてましたと言わんばかりに

飛び込んできた

その日は

烏達の食べ物とは別に

鍋を作った

食材はかなり買ってきたのでいくらかは持ちそうだ

空間収納の魔法はこういう時に役に立つ

そう思いながら

中にある食材をうんうんと確かめた

しかしこの量、紫さん本当にお小遣い程度を渡したのか…

もしかして、結構な量をくれたり

などと思ったが考えるとなんだか申し訳なくなつたので

気にしない事にした

その夜、少し

酒を飲みながら月を眺めていた

まん丸な月だった

ふと、禍の事を思い出す

セト「俺が戦闘部隊に入ったらあんなのと戦うのか

でも、文さんを守れると思ったら案外やりがいのある仕事かもなあ」

そう言った後、なんだか照れくさくなり

その日はすぐさま布団を被り寝てしまった

山の奥地…

アカネ「…現在の死傷者は」

そう聞くと

医療班の烏天狗「…死者2名、負傷者18名です」

と血で汚れた紙を見ながらそう答えた

その声は、震えていた

アカネ「…くそ！」

ただでさえ人手が足りねえってのに

先に逝ちちまいやがって、」

そう言うアカネの目は悔しさに滲んでいる

戦闘部隊の烏天狗「アキヒコ…仇はとったぞ…」

体を血生臭く濡らし

天を仰ぐ烏天狗

哨戒班「北！2番！禍の報告！」

哨戒班はそう報告するとすぐに別の班に報告しに行く

この報告の道中で襲われる白狼天狗も少なくないらしい

アカネ「休む暇もないってか、

行くぞ！お前ら！」

戦闘部隊「おう!!」

全員の目が闘志と、悔しさと、悲しみに燃え

武器を握る手は怒りか恐れか

何人かが震えていた

これでも場数を踏んできた部隊

しかし仲間の死はあまりにも重いものだった

それは平和すぎるこの幻想郷という場所だからなのか

それとも烏天狗の素質なのか

そんなことを考える暇もなく

戦闘部隊は体を血に染める



上を見れば

綺麗すぎるほどの満月が  
夜空に浮かんでいた

## 第十一話 迎え

「お前！ちゃんと力入れろ!!」

その怒号に、木々に止まっていた小鳥達が、一斉に空に放たれた。

ここは戦闘部隊の訓練施設らしい。

何故俺がこんな所にいるのか

答えはなんとも単純。

朝寝てたらアカネさんに片手で勢いよく掴まれ

ここまで引きずられてきたのだ!

なんだってこんないい日にこんな事になるんだ

まだ寝てたかったのに:

セト「あの、アカネさん、いきなりなんですか」

眠くてしよぼしよぼした目をできる限り見開き質問した

アカネは呆れた表情をし、息を吐いた

アカネ「いきなりってお前なあ:

前から言ってただろう

顔ぐらい出したらどうなんだ全く……」

それにお前はあーだこーだ来て見りや寝てるしだのなんだのとグチグチと一人で喋っている

：相当怒ってらっしやる

セト「すみません、色々と事が重なって……」

アカネ「言い訳はいい、現にこうして見学してるんだからな」

来てくれるだけでも充分さ

そう言つてアカネはおもむろに歩き、色々な施設の説明をし始めた

まず基本的な戦闘訓練所

地上から空中

弾幕を鍛える場所もあるようだ

しかし、あまり人は居ない

理由を聞いたら、まず弾幕を使えるものが少ないそうだ

それに水中の訓練施設もあるらしい

訓練だけでなく図書館や食事処などの施設もある

かなり充実した場所だった

アカネ「どうだ？ 戦闘部隊も悪くないだろう

皆と仲良く出来るよう泊まる場所もあるぞ」

それに、と付け加え

アカネ「前にも言ったがお前には素質もある、と思う：

ここで訓練して山の平和を守ってみないか、な？」

何故そこまで言うのだろう

少し疑問に思ったが考えれば分かる

恐らく毎日死ぬか殺すかなのだろう

こんな危険な仕事、好きでやるやつなんてそうそういない

この訓練施設でも、烏天狗達は沢山居るがこれでも足りないのかもしれない

しかし、求められる事は嫌では無かった

行くあてもなければこれから食ってけるのかも分からない

それに、この山の、文さんや、天魔様にも感謝しなければならぬ

どうせあの時、住処を追い出された時、

使い道のなくなつた命だ

なら誰かのために命を使うのもいいかもしれない

そう思った

セト「分かりました、俺でも役に立てるなら」

そういう事で俺は妖怪の山の戦闘部隊の一員になった  
これからまったり暮らすことは出来ないかもしれないが  
それもまあ、  
休みくらい：あるよね

その日の夕方、

何周か訓練施設を回った後、帰ることにした。

なんでもこれから禍が現れる時間らしい。

アカネさんはカズハと呼ばれていた女性と話している

二人とも真剣な面持ちで、

これから起こるであろう戦闘について話しているのだろうか

流星に内容までは聞こえなかったが

その場には居づらかった

帰り道、何者かが行く手を塞いだ

セト「：ヨルト？」

それは確かにヨルトだった

ヨルトの形をしたなにかだった

薄く青を体の表面に浮かばせ

少し透けている

ヨルト？「キテ：キテ」

のろりと右腕を上げ

ちよいちよいと小さく手を招いている

そのまま林の奥に消えていった

セト「不気味だなあ」

そう言いつつも、好奇心は隠せない

ヨルト？の言う通り着いていく事にした

歩いて、歩いて、

途中、何度か話しかけてみたが

「キテ」としか言わず自然と対話を試みる事もやめた

川を渡る時も少し浮きながら移動し

足だけ動かしているのを見ると変に律儀で少しおかしかった

歩いて、歩いて、

日が落ちたのか

いや、光が差し込まなくなったのか

いつの間にか暗い森に入っていた

歩いて、歩いて、

どれくらい歩いただろうか

相変わらずヨルト？はキテと言いながら

浮きながら歩いている

そして、ここが来たことのある場所だと思い出す

ヨルトの居る場所、魔法の森だ

そして何も無い所でヨルトの影は止まった

そしてまたのろりと手を挙げ

目の前の空間に手をかざした

セト「何してんだ」

と言いかけた所で目の前に見覚えのある建物が現れた

なるほどこうやってヨルトは暮らしているわけか

関心した所でヨルトの影は消えてしまった

ヨルトの家の扉を開ける

酷く散乱した部屋が目にとまったが

ヨルトの姿は無かった

セト「ヨルト？居るか？」

とりあえず声をかけてみたが、

自分の声が奥に消えただけだった

まだ地下室が残っていたのでその階段に向かった

ヨルトが魂の研究をしている場所だ

1歩2歩と階段を降りる

セト「ヨルト？」

その声をかけると

奥に動く影を見つけた

セト「なんだ、無事……」

そう言いかけた瞬間

ヨルト「ああああああアアああ!!!」

君は！キミはああ!!あはハハヒひふー！ふはははは！

確か！誰だ!!誰だ貴様!!セトだろうか！セトくんだろうか!!なああにいつてヤガ

ルうう!!!」





ヨルトは青い小瓶を奪うようにとった後

ごくごくとの液体を飲み干した

そのあとはペタリと座り込み、

少しの間何も喋らなくなった

セト「ヨルト？大丈夫か？」

そう恐る恐る声をかけると

ヨルト「ん、ああ、君か

ごめんね、研究をしようとたまにああなるんだ

君の魂は少し特殊でね

僕の使い魔を君に送っただろ？

危なかった、久々に、ふひひ」

最後の気味の悪い笑い方からしてまだ少し残ってそうだがとりあえず大丈夫そうだった

ヨルト「それと、君の魂、魂、ああ魂のね、

研究をしてたんだよな、してた、してたね

そしたら色々わかかわかってきたたたたんだが」

何だかおぼつかない話し方をしていたヨルトは

ふと立ち上がり

ヨルト「ごめん、もう少し休ませてくれ

ろれ、ろれつが回らないんだ」

そう言うのとヨルトは奥の部屋に入ってしまった

セト「な、なんなんだよ全く」

思わず口に出していた

今の今までずつとまともな呼吸が出来ずにいた

初めてヨルトを怖いと思つた

しばらくするとヨルトが戻ってきた

ヨルト「ごめんなほんとにごめん

もう大丈夫、さつきも言つたけど魂の研究しているとたまにああなつてね

そして君の事について分かったことがある」

そう言うヨルトの目はいつも通りで

むしろ、いつもよりキラキラしていた

ヨルト「まず君の魔力、これはとてもいいものを持っているね

流石悪魔という所か

そこらのやつよりも強いよとてもいい

そして君の過去とかも分かったんだけど

辛かったね」

セト「いや、良いんだよ

君が気にする事じゃない」

ヨルト「それも、そうだね

あー、それと君をここに呼んだ理由は

僕を救って欲しかっただけだから

どうする？今日泊まっていくかい？」

そう尋ねられたが、今日は泊まる気分でも無かった

なんせあんなもの見せられたもんだから

セト「今日は遠慮しとくよ

研究も程々にな」

そう言うのとヨルトは罰が悪そうな顔をして

確かにそうだねと笑った

そのままヨルトの家を後にし

家に帰った。

ヨルト「うーん、あの事は黙っておこうかな…  
さて、これからどうなるのかね…」

## 第十二話 あの日

朝

清々しい空気

カラス達の寢息

まだ温みが残っている布団から出るのは億劫だが

今日からやるべき事が出来た

この山の、烏天狗達の戦闘部隊で仕事をする事になった。

とは言つてもまだ訓練生だが。

名誉ある事なのだろうが

来て数日しか経つてないこの世界で

仕事をするというのは少々気が滅入る。

だが、俺にはもうすがるものがない

せいぜいこの温かい布団くらいだろうか

必要とされるのなら行くべきだ。

カラス達の朝食を作り

出掛ける準備をする。

外に出ると、強い日差しが目をくらませた

季節はまだ夏

早く秋が来て欲しいものだ。

訓練施設に向かう途中、ヨルトの事を思い出した。

彼のおかげで、慣れない料理もそつなくこなす事が出来たのだ。

しかし、昨日の事がやけに気になる

あの後彼は大丈夫だったのだろうか。

また、研究に没頭してあんな状態にならない方がいいが……。

それにしても俺が来る前はどうかやって対処していたのだろうか。

同じ魔法の森に住んでいる魔理沙さんもヨルトを知らないようだったし

落ち着くまで耐えていたのか

まあ、「たまに」と言っていたから頻繁に起きる事でも無さそうだが

そういえば魔理沙さんの所に行っていないな

挨拶でもした方がいいのだろうか

そんな事を考える間も、しつこく太陽が照りつけるので

少し森側の道を歩いた。

木陰は涼しく、葉が風と遊んでいる音も心地よい。

誰かの事を考える事も、こうやってゆっくり歩く事も、住処を出てつてからはなくなつてしまった。

この幻想郷に来て、そんな当たり前の事を感じられる事を嬉しく思った。

反対側には川が流れていて

何かの生き物が見え隠れしている。

ここは幻想郷、何が起きても不思議ではない、と誰かがこぼしていた気がする。

あの生き物も、俺の世界では見た事はないが

こんな世界だからこそ、気にしない事にした。

森の小道を抜けて、脇に草が少し生えてる道をしばらく歩き、川にまたがる木の橋を渡り、また同じような道を右に行つてまた右に行つてしばらく進んでいくとそれはあつた。

訓練施設。

今日から、俺が行くべき所だ。

敷地に入ると茜さんが見えた。

セト「あ！茜さん！」



いつもより大きな声が出た

さつきまであんな事を思っていたせいかな、

人と会うのが嬉しく感じた

茜「お！早速来たな！

元気がいいじゃねえか！」

茜は眩しい笑顔で応えた

その元気がいつまで持つかな、と冗談を言いながら

施設内にはもう、2、3人の訓練生が居た

まだ朝も早いはずなのに。

男2人に女が1人

皆、カカシに向かってひたすら木刀を振っている

打たれ続けているカカシはボロボロで

どれほどの時間、どれほどの人数に打たれ続けたのかが見て取れた。

茜「頑張っているだろうあいつら」

少し練習に見入っていると茜さんがそう話しかけてきた

その目は何故か寂しげだった

茜「どんなに優秀でも、どれだけ努力を積み重ねようと、戦場で、死ぬやつは死ぬ

あいつらだけじゃない、他のやつだって頑張っている  
皆、この山の、家族を、友人を、恋人を、守りたい

そんな一心で入ってきた奴だ

そんな奴らが目の前で死んでいくんだよ

私を庇って死んだ者、1匹も殺せずに死んだ者、馬鹿みたいに突っ込んで死んだ者も

いた

なんで、殺されなくちゃならないんだろうな

私達は本当にこの山を守れているのかな

そんな事を思ってしまう時があるんだよ。

悔しいな、悔しいよ」

その声は、震えていた。

茜さんが何故そんな事を言い出したのか、その心境を推し量る事は出来なかったが、

この人が、今までどんな死線をくぐり抜けて来たのか

それは何となく分かった

茜さんは普段は明るい人だが、その性格もそういう経験を通して、あえてそうしてい

るのか、とまで思ってしまった。

そして、俺自身が、この山で命を落とす事を覚悟出来た気もする。

茜「悪い、少し湿っぽくなったな

昔を思い出したんだ

お前に話したって分かるもんでもないよな」

そう言つて茜さんはいつもの笑顔に戻つていた

俺は何を伝えたらいいのか分からず

ただ、笑つて返しただけだった。

さて、お前もやつてこい、そう言われ

カカシの方へ歩いていく

先程の茜さんの横顔を思い出していた。

何か言つてあげべきだった

そんな気がしてならない。

カカシの前に来ると

皆一旦訓練をやめ気兼ねなく話しかけてくれた

最初に話題になったのはやはりこの角の事だった

悪魔の血を受け継いでいる、なんて事を言ったら嫌われてしまうかもしれない。

増してや、これから共に戦うかもしれない仲間なのだから

だが、そんな心配は無かった。

3人とも気にすること無く話を続けてくれた。

訓練に戻った後も、木刀の握り方や

振り方なんかも教えてくれて、とてもやりやすかった。

幻想郷に来てからかもしれない

色んな人に親切にされるのは。

昼になると、人も増えてきて

しばらく経つと

休憩時間、俺は皆の話題の中心になった。

あまり目立つことは好きじゃないのだが

とても楽しい時間を過ごせた。

それが終わると厳しい訓練の再開

皆、さつきまでとは別人のようだった。

硬い表情、溢れ出る殺気、木が激しくぶつかる音

そんなものを見せられると、自分はまだまだ未熟なのだなと思ひ知らされ

その悔しさに自然と木刀を握る力は強まり

声も大きくなっていった。

太陽が傾き、空が赤くなる。

茜「よ！お疲れさん

初日からよく耐えたな」

訓練が終わり、茜さんが話しかけて来た

いつもの茜さんを見たら、忘れかけていた朝の出来事を思い出した。

しかし、わざわざ掘り返しても仕方がないから、忘れる事にした。

その方が茜さんも楽だろうと思った。

セト「あんなに、厳しいものなんですね

少し、疲れました」

少しと言ったが実際、体が震えるほど疲れていた

あんなに激しく動いたのは久しぶりだった

その様子を見て茜さんは笑っていた

茜「でも凄いことさ

大半の奴らは初日でやめちまう

もちろん、明日もあるからな

気張れよ」

そう強めに言われ、気を引き締める

続ける気持ちはあるが体がついていけないか少し心配だった

そうだ、まだやる事がある、来い、とそのまま茜はセトをある場所へ案内した。中に入ると、刀がズラリと並んでいた

セト「ここは……？」

そう聞くと、茜はニヤリと笑い

茜「見ての通りさ、刀の倉庫だ

訓練生とはいえ、お前は今日から戦闘部隊の一員だ

いつくたばるかは知らねえが帯刀くらいさせてやろうと思つてな

護身用でもあるが実戦にも使えるぞ

それに、いちいちお前のあの戦鎚を取り出すのに魔法陣書いてる暇も無い時もあるだ  
ろうからな

好きな刀を選べよ」

確かに言えてる

茜は中に入るよう促した

中には色々な刀があつた

よく聞く刀の形をしたものもあれば

おおよそ刀とは言い難い形のもの

巨大な刀まで多種多様だった

そしてしばらく見ている時、目に止まる物があった

紺色の鞘、鍔が刀身と一体化、というより鍔がないようにも見える、柄は少し曲がっていて、刀身もよく見る刀とは少し違って見える

その刀に運命のような何かを感じた

茜「お、それに決めたのか

なるほど柳葉刀に似ているが少し違うみたいだな

まあいいか、じゃあこれを持ってにとりの所まで持って行ってくれ

刀を研ぐのもデザインを変更するのものとりの工房でやってるから」

セト「にとり：・聞いたことない名前ですね」

そう言うとき茜さんは少し笑ったあと

茜「そりやそうさあんたはまだ会ってないと思うからね

ほら、これ地図だ

行く途中に禍に襲われるなよ

今のお前なら抵抗出来ても一口であの世行きさ」

茜さんは冗談を言ったつもりらしいがおおよそ冗談には聞こえなかった

力のない笑いをこぼす

そのままにとりの工房、とやらの歩いて向かった

地図は意外と丁寧に描かれていて

道は迷うことは無さそうだった

こういう所を見ると、茜さんは細かい事が好きなのかもしれない、そう思った。

これを茜さんが描いた確証はないが

歩いていると、当たり前前の事だが時間は確実に過ぎていく。

辺りは星の光だけが頼りの暗い世界になった

手に持った刀をぎゅつと握りしめ

地図を頼りに歩いていく

フクロウの声がどこから聞こえ

涼しい風が通り過ぎた

禍とかいう存在がいなければ

こんな夜にはゆつくり月でも見ながら酒を飲みたいものだが……

そんな事を考えている間に淡く光が見えてきた

あれがにとりの工房とかいうやつかな

そう思い、駆け寄ろうとした瞬間、

ぐるぐる

ふるるといふ音が聞こえた



その音に気づき後ろを向いた途端

「シヤアアアアアア!!」

黒い塊、赤い目、禍だ

襲いかかってくる、止めなきや止めなきや止めなきや

死んでしまう死んでしまう

一気に思考を巡らせ右手に持っていた刀の存在を思い出す

抜く暇もなく襲いかかってきた禍をすんでのところ

鞘で防ぐ

幸い相手は1匹だった

素早く両手で鞘を持ち直し相手に突きつける

ガリガリと鞘に歯を立てながら

鋭い爪で喉元を切り裂かんと鬼気迫る表情を浮かべ、暴れている

禍の力はとても強く

抑えられるものでは無かった

セト「ぐつつうつ… まずい、このままじゃ…」

こんな所で死ぬのか

ふざけるな! まだ! 俺は!

何も守れていないのに！

そんな思いも虚しく

禍の力はどんどん強くなっていく

並大抵の力ではない

本当に死んでしまう…！

そう思った矢先、禍が突然消えた

いや、目前まで迫っていた顔が消し飛んだのだ

??? 「フー、やはり私が開発したこの超次元ハイパーミラクル電撃光線発射バズーカの

威力は格別だね

あんな禍さえも1発でどかんだ！ヒュー！」

そこには水色の服を着て青い髪をツインテールにし、緑の帽子を被った少女がごつい

銃を構えて立っていた。

そして1人でベラベラと喋っている。

??? 「そして、ピンチの旅人を助けてしまった

あーなんて天才的な判断力！惚れ惚れする！」

セト「あの一」

??? 「ひゅい!?なんだ、君か、驚かせないでくれ

今、私の世界に入っていたんだ……て、君の持つてるそれは！フリツサやファルカタといった刀の仲間ではないか！そして、その羽を見る限り君は烏天狗だね？

茜ちゃんにでも頼まれたとかそーいう類の話でしょ？」  
と早口で話した

セト「その通りでs:。」

???「あー！みなまで言うな、みなまで言うな……

分かつてる分かつてる

まあ、その角を見る限り君はセト君だね

文からの新聞で見たよ、戦闘部隊に入ったんだねえ

そうかそうかうんうん

実は今日君とはちよつと会ってるんだけどね

まあいいや

あ、お察しの通り私にとりだ

君の刀は預かっておくよ

仕上がったら茜ちゃんに連絡するからその時また来てね」

にとり、と名乗ったその女性はウインクした後

さつさと奥の工房に戻って行った

突然の事で呆気にとられたセトはその場でしばらく動けなくなったがぐちやぐちやになった禍の死体を見た後急に怖くなりいつもより倍近く高く飛んで家に帰って行った。あれ、にとりさんに会ったことあるつけ……

まあ、いいか

セト「ふう〜

ただいまー！」

心身共に疲れ果て

玄関に寝転がった

すると、奥から足音が聞こえた

文「セト隊員！戦闘部隊！入隊お疲れ様であります！」

そう言うのと素早い動きでおでこに手をかざすようなポーズをとった……  
多分敬礼

セト「……文さん？」

ピシッと敬礼の構えをとったまま動かない文の顔は

薄く赤らんでいて、少しふにやっとしていた

カラス達の話によると、俺が戦闘部隊に入隊した記念に

いい酒を持ってきて一緒に飲みたかったらしいが

帰りが遅く先に飲んでしまったのだと言う

悪い事をしたかも、そう思ったが

文さんのお酒を飲んで幸せそうな顔を見ると案外ラッキーだったかもと思ってしま  
う自分もいた。

その夜は、2人で遅くまで飲み

文さんの仕事の愚痴を聞いたり

お酒が入って少し甘えるようなそぶりを見せる文さんに対して理性を抑えるのに必  
死になったりしたが、それはまた別のお話

そして、文さんは結構お酒が強い事が分かった

めっちゃ飲む

そんなこんなで楽しく夜を過ごしたセトだが

明日、また訓練がある事は頭の片隅にも残っていないなかった

## 第十三話 ひとつふたつ

朝……なのかな？

日差しがうるさい

あの朝特有の澄んだ空気も感じない

嫌な予感がし、外に出てみる

日が！高く昇っている！

鳥1 「あ！起きたー！」

鳥2 「もうお昼近いよ〜」

セト 「え!?!昼!?!」

鳥3 「さつき美味そうなお肉あったんだ！

それ食べてた！」

眼前には鳥達が飛び回っており

皆喋りたいことを口々に言っていた

そんな事を聞いている場合ではない

今、昼なのだ！

茜さんの怒った顔を想像しただけで気が気ではなかった  
急いで出かける準備をする

置き手紙が机に上にあつたのが見えた

手に取り内容を確認する

「何度も起こしたんですけど起きませんでしたよ

きつとすぐごく疲れていたのでしょう

私は先に帰ってます

昨日は楽しかったですね

あんな事をされるなんて…」

!?

俺、なにかしちやった？

「なーんて冗談ですよ

それではまた飲みましようね

文より」

セト「なんだ、冗談か、びつくりするなあ」

などと言っている場合ではない

強引に靴を履き、

ガラガラと音を立てながら、戸を開ける

眩しいくらいの日差しに、顔をしかめた

昨日のようにのんびり歩くわけにもいかない

そう思い、羽を広げる

ピキキと骨が鳴った

体が動くのに慣れていないうちに、急に羽を広げたせいだ

そんな事はお構い無しに、セトは訓練施設へ向かった。

日差しは相変わらず、眩しく

急ぐ自分の事を笑っているように思えた

ぐん、とスピードが早くなる

目が痛い、空気中のチリが、物凄い速さで体に当たる

そして、薄く開いた目に訓練施設が映った

セト「茜さん、はあ、はあ、遅れました、すみません」

出来る限りのスピードで羽を動かしたせいで

体はかなり疲弊し、汗はダラダラと垂れ、



顔を上げるのも辛く、うつむきながらはあ、はあ、と息を立てていた

そんな姿を晒しながら、何を言われるのだろう

きつと怒られる、そう思ったが

茜「随分と急いできたんだなあ

なに謝ってんだ

訓練は昼からで良いから、さっさとその汗臭い体を休めとけ」

そんな言葉だった

てつきり怒鳴られると思っていてセトにとっては、

かなり意外なものだった

なんでも、この訓練施設は

好きな時に来ていいのだそうだ

皆、色々な事情があるそうで

空いた時間に訓練をする者ばかりだという

そして、所謂新人は大抵2日目は訓練に遅れるそうだ

その中でも優秀な者を戦闘部隊に入れるらしい

その話を聞き、安心、とはまた違う感情が心の中にあつたが今は休みたい

建物の影に腰を下ろし

訓練生を見ていた

皆、目の前の力カシに向かい、殺気をぐわつと漂わせながら、木刀を振っている  
いつか俺もあそこまでの域に達することが出来るのだろうか

走り込みをしたり、空中戦の訓練をしたりしている訓練生を横目に

その時は、ただそれだけが、心配だった

昼休憩の時間

昨日話し掛けてくれた人が寄ってきた

3人だった

名前をシズハ、サトシ、ヤスタカ

と言うらしい

3人とも幼なじみらしいが

シズハとサトシは付き合っているようで

仲良く、くつついていた

その2人を見てヤスタカは羨ましい限りだ、とセトに言った

その声はとても穏やかで、2人を信頼しているようだった

昼休憩の時間、4人は仲良く昼食を食べた

生憎、昼飯を忘れたセトはサトシからおにぎりを

2つ貰った

中身は鮭、サトシの手作りだそうだ

美味い

そして、昼休憩を終えた後、

セトも訓練を始めた

昨日の影響で

筋肉痛がかなりひどいが、周りに負ける訳にはいかない、俺は、この山の為に戦わなければ、そんな気持ちで重い木刀を振り続けた

腕の力が無くなっていくのが分かる

腕は激しく熱を帯びていた

それが終わったら次は走り込みやら、体術訓練やら、

空中戦の弾幕訓練は参加出来なかったが

その分接近戦の方に力を注いだ

疲れのせいか目の前のモノに意識を集中出来ずにいた

ただ、何も考えられなくなっていた

そして、夕方、今日の訓練が終わった

頭がぼーつとする

昨日と同様、いや、それ以上に体は重く、歩くのもきつくなっていた  
これを、毎日……

訓練生達の疲労を、察する事ができる

いや、俺が頑張りすぎなのかもしれない

思えば、皆一日に全部の訓練をした訳じやなさそうだし、

少しずつ慣れさせていけば良かったかもしれない

セト「ちよつとやりすぎたのか……」

力なくそう呟いていた

今日は日陰を通ってゆっくり帰ろう

そう思った矢先、茜さんに呼ばれた

何の用だと思つたら昨日の刀の仕上げがもう出来たのだという

それを受け取つてこい、だそうだ

話の途中、にとりさんが茜ちゃんと呼んでいた事について聞いてみたら、茜さんは笑  
顔で怒っていた

多分、恐ろしい事になる

沈んでいく日を眺めながら

にとりさんの工房に向かつて、飛んでいる

風がちょうどよく吹き、疲れた体を癒してくれた

気分は沈んだままだった

早く帰って寝たい

頭の中にその文字が刻み込まれていた

地図は家の中に置いてきてしまったが

昨日の事だし、あんな事があつた場所を忘れはしない

フラッシュバックする映像に夏だと言うのに身震いした

しばらく飛んでいると、あの光が見えてきた

中で火でも扱っているのか

オレンジ色の光だ

そして石で出来た特徴的なドーム型の建物

もうすぐ秋が来ようとしているが、まだ夏

この暑い中、あのいかにも空気の出入りが少なそうな所で火を扱うなんて、考えただ

けでも汗をかきそうだ

扉の目の前まで来ると、熱気が一気に押し寄せてきた

ただでさえ訓練で体が熱くなっているというのに  
なんて最悪な場所だ

しかも、あの早口をまた聞かされるのかと思うと……

考えれば考えるほど気分が沈む

誰が悪いという訳では無いが。

ゴングン、と重い金属のような音を立てる扉をノックする

中からは忙しなく金属音が聞こえてきた

そういえば、この幻想郷に来てから機械とか見たことないなあ

そう思った時、扉が開いた

にとり「はい…… あつ、昨日の」

出てきたにとりさんは

昨日とは全く雰囲気違った

とても静かで大人しい印象を受けた

まるで別人のようだ

とりあえず中に、と言われたので

恐らく疲れだけが原因ではない重い足を

中に入れた

くそう、なんでこんな暑そうなところに

そう思ったが中は涼しかった

露見した鉄のパイプやら、配線やらが

目に映った、そして、時折鉄パイプから音を立てながら

熱い蒸気が漏れ出す

奥の方にはデカい歯車と小さい歯車が無数にあり

歯を合わせながらぐるぐる、ぐるぐると回っていた

そして鉄を溶かすためのものなのか

いかにも熱を使いそうな設備が沢山あった

それなのに、なんでこんな涼しいのだろう

にとり「ああ、気になったのかな、ここが涼しい理由、

あのね、にとりオリジナルの特殊な機構を使っているからね

いつでもここは快適なんだよ」

と、静かな声で言った

思えば騒音もかなり少ない

外に漏れてた機械音の方が大きいくらいだ

不思議だ

そして約束の刀を受け取った

にとり「君からは、魔力を感じたから

魔法金属で仕上げてみたんだ、これなら、君の魔力にも順応して、最高の切れ味が出ると思う

それと、この刀に装飾とかしたかったらいつでも言つてね、待つてるから」

そう言つて、にとりは小さく笑つた

昨日のあのにとりとは全くの別人で、戸惑いを隠せないでいた、それに、魔法を使える事を見抜いていたようだ

確かにここなら見抜ける道具とか作れそう

そういうの分らないけど

刀に装飾、と言われたが今はあまり付けたいものは無かつた

にとり「昨日は新しい武器が出来てテンション上がつてたんだ、少しお酒も入つてたし、ほんとに少しだよ？」

あ、そうだ、ここならほとんどの機械造れるから

こんな機能がある物が欲しいなーって思つたら私に言つてね、頑張るから」

そう言つてガッツポーズをして見せた



小さい体だが筋肉はしつかりしているようだ

そして、少し飲んだ事、を念入りに訴えてる所を見て疑いを隠せずに居たが、それは置いておく

それより、彼女は機械を造ってくれるそうだ、

何か欲しいものがあつたら言ってみよう

そして、少し話をした

途中茜さんの件の事をセトが言うと、にとりは一気に顔を青くし、遠くを見つめ、力ない笑いをこぼした

悪い事をしてしまったかもしれない

帰り際にはもう夜になっていた

あの禍の事を思い出す、

そういえばにとりさんはこんな

山の外れにいて、禍とは遭遇しやすいのではないか

そう思い聞いてみたら

にとり「自分の身は、自分で、」

そう呟き、中から持ってきたごつい銃を構えた

これなら襲われても大丈夫そうだ

にとりに別れを告げ

空高く飛び立つ

腰には魔法金属で鍛えられた刀を差している

その鞘は、月光に照らされて

淡く、綺麗に、光っていた。

## 第十四話 戯れ

髪に掠る、足に掠る、羽に掠る。

セト「うわっ！」

危ない、少し遅かったら当たっていた。

目の前には、視界を覆うほどの光の玉が散りばめられていた。

光の玉は大小様々、色はキラキラと変わり続け、星型のものが多かった。

それらはセトに当てるために散りばめられた星屑。

スピードも様々で、こつちに避ければ、遅くやってきた光の玉に当たってしまう、あつちに避けても密度が高く避けきれない。

まさに、星空の檻だ。

羽ばたくのにも気を使ってしまう。

それらに翻弄されると、この光を散りばめた本人が得意げに叫んだ。

魔理沙「どーした！セトよお！弾幕ごっこつてのは

避けられない弾幕は張らないんだぞーははははは」

魔理沙から同心円状に放たれる光の玉達。

魔理沙は自分が放った弾幕に、翻弄されるセトをにやにやと見ながら、箒に跨り、空を飛んでいた。

確かに避けられない事はない、がこの弾幕の隙間は、狭すぎる。

セト「クソツタレ……！」

小さく叫び、セトは魔理沙に腕を伸ばす。

瞬間、セトの手のひらからレーザーが放たれる。

これも一種の弾幕だ。

しかし、魔理沙は、何だこの程度、と言うように

ひらりと身を返してみせた。

魔理沙「そんなんじゃないや私に当てるのなんて10、いや5000年早いよ！」

その間も、弾幕は絶え間なく放たれ続け、

セトのスタミナをじわじわと奪っていく。

セト自身、まだ弾幕というものにも慣れていない。

それに対抗出来る術もまだ身につけていない。

さつき撃つたレーザー、そして、この弾幕を避けきるので精一杯だった。

その様子を見かねた様子で、やれやれと魔理沙はポケットから紙切れを取り出す。

そして、何かを叫んだが、セトには聞こえなかった。

その後のことは覚えていない。

広がるのは清々しいほどの青空。

背中にはジャリジャリした土の感触。

しばらく状況を理解出来ず、仰向けに寝転がっていると

魔理沙さんが顔を覗かせてきた。

魔理沙「やっぱり何も教えてない状況で弾幕ごっこは無理があつたか」

そう言うてにししと笑う、その横から霊夢さんが顔を出した。

霊夢「当たり前でしょう。全く、それにしてもあんたの弾幕も変わらないわねー。お

茶一杯分楽しませてもらつたわ。」

ほら、立ちなさいと霊夢さんが手を伸ばしてきた。

その手を掴み、ふらふらとバランスを崩しそうになりながら、なんとか立った。

ぱつぱつと服の埃を払い、周りを見る。

ここは、博麗神社、か。

えーと……？

あー、思い出した。

あれは、何時間か前、

ほわんほわんほわんほわんほわわーん

何だこの音

魔理沙「あれ、セトじゃないか

どうしたんだ、というかよく迷わなかったなあ」

眼鏡をかけて、片手に本を抱えながら出てきたのは

魔理沙さんだった。

ここに来る途中は、確かに迷ったが、

何となく勘を頼りに進んでいたら目の前に家があったのだ。

その家が魔理沙さんのだという確信はなかったが

とりあえず心細かったのでノックしたままである。

なんとも不思議な話だが結果オーライという事で気にしない事にした。

玄関先で、一言二言会話を重ねた後、

魔理沙さんの家で話す事になった。

中は、見た事のない植物やら、葉やら。

本棚には、本がびっちょりと並んでおり、ベッドの上には本が散乱していた。

汚い。

その様子を見て魔理沙は

魔理沙「き、汚いのは気にしないでくれ

なんせ客人なんてそうそう来ないもんだからさー

あははー」

と、手で頭をかき

恥ずかしそうに笑った。

気にするな、と言われるとむしろ気にしてしまうものだが、今日は魔理沙さんに頼み事があつてきたのだ。

掃除をしろと言いに来たのではない。

そう思い、まだ座つてもいないが、単刀直入に聞いた。

セト「魔理沙さん、俺に弾幕を教えてくれませんか」

そう、弾幕についてだ。

その後、魔理沙さんとは、色々話をした後、魔法の森だと戦いにくいから、という理

由で博麗神社に行く事になったのだ。

博麗神社に着くや否や、俺と一緒に飛んできた魔理沙さんを見て霊夢さんに嫌な予感がする、と言われてしまったが弾幕ごっこくらいなら、という事で了承を得た。

そして、基本も何も教えられてない状況で

いきなり弾幕ごっこが始まり、今に至るのである。

とりあえず休憩。

博麗神社の縁側に座り、空を眺めた。

今、目の前に広がる青空が見えなくなるほどの、弾幕を張っていたんだなあと思うと、魔理沙さんもやはり只者ではないと感じざるを得なかった。

しかし今日は訓練を休んでまで来たのだ。

何か得られるものがあるといいが。

すると、居間からせんべいを2枚持ってきた魔理沙さんがトコトコと歩いてきた。

居間では、霊夢さんがぼーつとしながらお茶を飲んでる。

魔理沙さんはせんべいの1枚を俺に渡した後、バリツと音を立てながらせんべいを食べ始めた。

魔理沙「弾幕ってのはなあ、パワーなんだよ、



「お前のあの一発だけで、相手が都合よく当たるわけがない」  
そう言うのと、奥で話を聞いていた霊夢さんが

出た、魔理沙のパワー論、と言いきすと笑った。

その様子を見てうるせえなあーと魔理沙さんは叫んだ。

霊夢「パワーも大事だけどいかに相手を追い詰めるかも肝心

だけど、弾幕ごっこは避けられない弾幕は張っちゃだめ。

まあ、結局の所バランスよねえ、死ぬわけでもないんだし、あなたが使う事もそう  
そうないと思うわ」

でも、あつて損ではないけどね

と言わずーっとお茶をすすった。

確かに、俺が使う機会なんて、

いや、出力とか変えると戦闘には使えるかもしれない。

魔理沙「まあ、お前がやりたいってんなら私はとことん付き合うよ

んじや、早速練習するか！」

そう言つて魔理沙さんは勢いよく立ち上がり、

歩いていった。それを急いで追いかける。

魔理沙さんは意外と教えるのが上手く、すぐに弾幕の出し方のコツなどがわかった。

人間と妖怪だと少しやり方が違うようだが、それでも難なくこなす事が出来た。

途中ちらつと霊夢さんの方を見ると

見覚えのある人と話をしていた。

紫さんだ。

久しく見ていなかったが相変わらず空間を裂き、そこから上半身だけを出し霊夢さんと話をしていた。

こちらに気づくと笑顔で手を振ってきたので、振り返した。

魔理沙さんの指導を何時間か受けた。

小さい弾幕から大きな弾幕、それに合わせて、レーザー状の弾幕を合わせるなど、色々な技を習得できた。

こんなに練習しても、力が尽きない事に、魔理沙さんは驚いていたが、これもヨルトが言っていた魔力が高い事に関係あるのだろうか。

試しに、この弾幕を圧縮するイメージで放ってみたら少し土が抉れたので、確かに威力はある事がわかった。

しかし、その弾幕を見た魔理沙さんは

弾幕ごっこではそれは駄目だ、と怒られてしまったので  
気をつけようと思う。

なんでも相手を傷つけないように作ったルールらしい。

確かにこれでは傷つけてしまうな。

そして、また練習が始まる。

途中から、実戦という事で魔理沙さんとは

何度か弾幕ごっこをした。

相変わらず魔理沙さんの弾幕は避けにくかったが、

こちらにも負けじと弾幕を放つと、少しは焦ってくれたみたいだった。

魔理沙「これで、軌道も思い通りに出来るようだ、尚いいんだがな。」

と、魔理沙さんは言っていた。

さすがにまだそこまでのレベルには達してないが

これから練習を重ね、習得していこうと思う。

… また、休む時間が減ってしまうな。

そして、一通り教える事は教えたようで、最後に紙切れを何枚かくれた。

なんだこれと、パタパタやっている

これがスペルカードなるものと教えてくれた。

スペルカード自体、どんなものでもいいらしいのだが

これは、弾幕ごっこの際使うらしい。

言われてみれば、弾幕ごっこの途中、魔理沙さんは紙を掲げ、何かを叫んでいた。

あれがスペルカードの使い方、という事だろうか。

この紙に技の名前みたいなものを書き、それを掲げ、宣言する。

その技は自分が考えた組み合わせの弾幕の事らしい。

魔理沙「基本的には○○符「なになに」って感じだがぶつちやけどんな形でもいいんだ。

相手にスペルカードだと分かってももらえれば」

と説明してくれた。

ゆつくり考えていけばいいさ、と魔理沙さんはいつもの笑顔を見せた。

そして博麗神社の方に歩いていくと

ようやく終わったの？

と言った感じで霊夢さんが出てきた。

魔理沙さんは霊夢さんに、こいつ意外と覚えるの早くて助かったわ、と笑ったが、も

う日が沈んでるけどね、と霊夢さんは返した。

言われるまで気づかなかったが、もうすっかり日は沈んでしまい、奥に少しオレンジ色の光があるだけで、肌に触る空気に、夜の気配を感じさせていた。

あ、もうこんな時間になってたのかと魔理沙さんは

焦りだし、また教えて欲しい事があつたら来いよ、と言ひ箒に跨り飛んでいつてしまった。

魔理沙さんに会うために、またあの暗い森を歩くのかと思うと少し、気分が落ちた。

今度ヨルトにでも地図を描いてもらおうか。

それじゃ、俺もそろそろ行きます、と言うと、いつでも来てね、暇だから、と言ひ霊夢さんは手を振った。

帰る途中、弾幕について考えた。

スペルカードと言っても名前とか思いつかないなあ。

組み合わせなんて、どうすればいいんだ。

などと巡らせてみても思いつかないものは思いつかなかった。

それにしても、帰る時間はいつも禍が出る時間だなあ。

そして、にとりさんの工房に向かう途中で出会った禍の事を思い出す。

戦闘部隊になる以上、禍に対しても

遠距離攻撃としての弾幕を使えるようにならなきゃな、  
そう思いながら、涼しい風の吹く夜空をのんびりと飛んでいた。

里に降り、家に向かって歩く。

里は平和だ。色んな所に丁寧に手入れされた畑があり、  
笑い声が漏れる家がある。

里の周りには特に白狼天狗達が多く配備されており

この平和を守っているらしい。

そういえばあの後、椀さんは大丈夫だったのだろうか。

こんな事情がある山の中だから、少し気になった、が

確認する術もないのでどうしようも無かった。

家の前に来ると郵便受けに手紙が入ってる事に気づいた。

この俺に手紙を送るヤツ……

わからん。

手紙を見ると差出人はヨルトだった。

何故俺の家が分かったのかと疑問に思ったが、ヨルトの事だし気にしない事にした。

手紙の内容を読むと、俺の能力についてだった。

俺がヨルトを正気に戻した時、伝え損ねたのだとか、まああんな状況だしなあ。

なんでも、恐怖心を操る事が出来るらしい。

やり方については分からないそうさ。

ただ、上手く使えばかなり便利な能力だ、と

確かに、そうさ、後で試してみよう。

試すものの目星はつかないけど。

そして、夜ご飯を作りカラス達に食べさせる。

俺は縁側に座り、酒を少し飲む。

星空を見ながら鼻歌を歌った。

夜空には息を呑む程の美しい星空が広がっていた。

セト「こんな綺麗な星空、あつちの世界じゃなかなか見られないなあ」

そう零したあと

風が心地よく吹き、流れ星が通った。

あ、歌符「星空に歌を」とかどうだろうか。

## 第十五話 信愛

雫羽「ほらほらー遅れるよー」

雫羽がそう叫ぶ。

それに応じて聡が駆け足で追いかける。

俺はそれを後ろから、笑いながら見ている。

周りには静かに揺れる木々が生え、

小鳥達が朝のしらせを口ずさんでいた。

靖貴「俺の前で惚気んじやねーよ」

そう、冗談交じりに言う

2人は顔を赤らめながら、うるさいなーと小さく呟いた。

全く、昔っからつるんでいるこいつらが

まさかくつつくとはね。

人生何があったか分かったもんじゃない。

それに、今から向かう所だつて夢にも思つてなかった。



聡の家は、昔から貧乏だったなあ。

聡は少し前までこの山の中心の市場で色んな店で働かせてもらって、色んなものを売っていた。

魚に、肉に、武器に、何に使うか分からないものまで  
ずーっと働いていた。

そして、その間にも俺らとも仲良くしてくれて、  
疲れてるくせに笑顔は絶やさないんだよなあ。

雫羽は多分、そんなお前に惚れたんだろう。

雫羽は昔からお前と居る時は楽しそうだった。

少し男勝りな部分もあったっけなあ。

今じゃすっかり乙女だが。ははは。

そして、聡の行く道にはとことん着いていくよなあ。

どんだけ好きなんだよ全く。

昔よりがつついてんじゃねえか。

良かったなあ。ほんとに、良かった。

そんな2人に出会えて、一緒につるんでき、

たまには怒られるような事もしたけど

俺にとつちやお前らとの思い出はかけがえのないものになったよ。つて、俺も幸せ者つてことかな。

俺なんて、なんにも持つてねえのに。

お前らの道に着いていくだけで精一杯だ。

康貴「ああ、最高の人生かもな」

そう、呟いた瞬間、聡が寄つてきた。

聡「んー？なんだよ、茜さんに会えるのがそんなに最高かく？」

そう、俺は今、茜さんに恋をしている、が

康貴「ばか！そんなじゃねえよ！」

改めて言われると恥ずかしいものだ。

茜さんに出会つたのは聡のおかげでもある。

十分大人に近づいてきた俺らに、聡は戦闘部隊で働く事を提案してくれた。

そこでは、命の危険こそあるものの、山を守り、人々を守る事が出来るのだという。

昔から聡はこういう何かを守るヒーローに憧れていたのだ。

さすがにまだ憧れていたとは思わなかったが、目をキラキラさせながら話をする聡を

見た俺は、変わらない奴だなと思いながら、その案にのることにした。

雫羽は聡が目指すなら私も、と最初からのる気だつたらしい。

そして、戦闘部隊になる為、訓練施設に着いた途端、そこに居る茜さんに一目惚れしてしまったのだ。

この2人に相談したのが悪かったかもしれない……。

こんなにかかわれるとは、悪気はないんだらうけどなあ。

まあそういう事で、俺らは今、訓練施設に向かっている。

ばか、と俺に言われた聡は

なんだよ、そこまで言うことないじゃないか、と口を膨らませていた。

こうやって朝早くから3人並んで歩くのにも

慣れてきた。

はじめの方は聡がなかなか起きなくて、かなり遅れた事もあったなあ。

あの時期は大変だった。

今は何ヶ月目だ。1年経ったかな。未だに俺らは戦闘部隊に入れさせてもらえない

が、もう少しの辛抱だと

心に強く思っている。この2人も同じ気持ちだった。

そして最近、新しい友人に出会えた。

セト、という名前らしい。

2日目からほとんどの訓練を回るのには驚いたが、

かなり動きの基本がなっていた。まあ、その後、案の定クタクタになつてたが。

これじゃ、俺らが越されるのは時間の問題かもしれない、そう思ったが俺にとつては、この3人で居られる時間があれば、それで良かった。

セトが嫌だつて訳じゃない、むしろ良い奴だと思つている。まあそれは頑張りすぎたセトに聡の影を重ねてしまったせいもあると思うが。

そして、しばらく歩いて訓練施設が見えてきた。

この、歩く度にのっそりと見えてくる訓練施設も見慣れてきたものだ。

そして、3人でだべつている内に施設内に着いた。

今日も3人が一番乗り！まあその前から茜さんは居るが。

未だに茜さんの顔を見ると目を逸らしてしまう。

いつまでうじうじしてるんだ、と自分に言い聞かせてはいるものの、そうそう慣れるものでもなかった。

そんな様子を見て聡と雫羽はにやにやと笑つていた。

訓練の準備をしている中、2人が話しかけてきた。

聡「今日も目逸らしてたな、そんなんで大丈夫かよ、ははは」

雫羽「ふふふ、私達が二人つきりにさせてもいいんだよ？」

そう、笑いながら言ってくる2人にいらぬ氣遣いだ！と言ったが、茜さんと二人つきりになる事を想像してしまった。その様子を見て笑う2人を、追いかけて回す。

そして、さっさと始めろ！と怒られる。

この、なんでもないような、そんな日常を3人で過ごせるのが、俺は大好きだった。しばらく木刀を振り続けていると、

セトが息を切らしながら、施設内に入ってきた。

休憩がてら、セトに話しかけると

朝にカラスのイタズラで昼だと言われて慌てて支度をして来たそうさ。来る途中に、朝だと気づいた時は、

安心と、カラス達の怒りで頭がいっぱいになったが

その勢いのまま来たらしい。

今日のおやつは抜きにしてやる、と言っていたセトを見ておやつだけかよ、と笑ってしまった。

確かに、でも他に罰が思いつかない、とセトは言った。

よほどカラス達の事が好きなのだろうか。

そして、疲れた体のままセトは休憩もなしに訓練に向かった。

あの方向は弾幕の訓練かな。

少し前まで弾すら撃てなかったのに、出来るようになったのか、角がある時点で変わったやつだと思っていたが、もしかしたら相当なやつかもしれない。

まあ、今は訓練に集中するか。

そして、夕方、考え事もしなくなるほど集中した訓練は毎日の事だが体がきつい。

奥からへろへろになりながら歩いてくるセトを見て

俺らにもあんな時代があつたなあと感じた。

そんなセトを見て、唸は水を差し出しに行っていた。

なるほど、俺もあんなふうに自然に気遣いが出来れば

茜さんにも振り向いてもらえるのではないか。

と、バカみたいな事を想像する自分に、

振り向いてもらおうとしてる時点で駄目だろう

頭の中の自分がそう言った。

まだ、勇気が持てない……。

帰り道、日中間こえていたセミの鳴き声もしなくなり

辺りには涼しい風に葉っぱを揺らす木の音だけが響いていた。

月明かりは、優しく3人の道を照らしていた。

康貴「今日も疲れたなあ〜」

そう呟くと、聡が笑顔を見せながら、めっちゃ疲れた！

と言った。

雫羽も疲れ切った声で同意した。

聡「でも、いつか戦闘部隊になれるって思ったらこの疲れも、悪くはないのかもな  
って思うんだよ」

康貴「どんだけポジティブなんだよ、俺はもう寝たい！それだけ毎日考えてる！」

雫羽「もおく3人で一緒に戦闘部隊になろうって言ったのは康貴でしょ〜」

確かにそんな事を言った覚えがある。

悪い悪い、と頭を下げた。

そして、聡は空を見上げ、

深く息を吸うと

聡「絶対、なろうな！3人でこの山の平和を、そして、皆を守ってみせるぞ！」

と叫んだ。

おう!!という力強い声が山に響く。

その声は、理想の叫び。

その声は、信念の叫び。

その声は、純愛の叫び。

3人の強い意志を、改めて燃やすには充分だった。



## 第十六話 交えるもの

訓練が始まって2ヶ月が経った頃だろうか。

カズオ「かかってこいよお！セトの坊主ー!!」

とてつもない大声で挑発するカズオ。

それを正面に受けるセトは、自然と木刀を握る手に力を込めていた。

遡ること数十分前：

俺は一通り訓練を終え、

いつもの3人組、シズハ、サトシ、ヤスタカと一緒に落ち葉の上で休んでいた。

季節はもう秋。

風が涼しく木陰で休むにはちょうどいい季節だ。

4人囲んで談笑しながら、木から落ちる葉を眺めていると

その奥から近づいてくる3人組に目が止まった。

??? 「よお」

にやにやと笑いながらその中のリーダーのような人物が

話しかけてきた。

??? 「俺の名前はスズキカズオ、この2人はダイキとハル、よろしくな」  
いきなり話しかけてきたこの3人組は、たびたび訓練中にも見かけている為、顔だけは知っている。

しかし大体は訓練場所とは真逆の方向にふらふらと歩いてるだけで  
訓練に参加している所は見えた事がない。

そんな3人がなんの用だ。

セト「うん、よろしく、俺の名前は…」

そこまで言いかけたところでカズオは

カズオ「知ってるよ〜セト君だろ〜こん中じや角生えた烏天狗なんて

中々居ないから結構有名だよ〜」

へへへへと大声で笑い、馬鹿にしたようだった。

やはりこの角が災いしたようで

面倒くさい奴らに目を付けられたようだった。

サトシ「おい、お前らセトになんの用だよ。」

そう言うと言スタカも

ヤスタカ「そんなつまらない事言うだけだったらどっか行けよ。」

と加勢した。

カズ才は一瞬怒ったような顔をしたが、すぐに戻り

カズ才「俺はセト君に話しかけてるの、それに用があつて話しかけてんだ  
セト君には決闘を申し込みに来たの

新人だからつて皆にチャホヤされて調子のつちやつてさー

だから、この鈴木家の血を引く俺が直々にお灸を据え手やろうと思つてさ」

と得意気にべらべらと喋り出した。

サトシはやつてらんねえと言ひ、カズハがもう行きましよと訓練所に戻ろうと促した。

セトもそれに応じ戻ろうとする。

しかし、カズ才は引き下がらない。

そんなもんか、結局お前はチャホヤされねえと生きて行けねえ、意気地無しー

などとその場で思いついたような罵声を浴びせてくる。

しかしセトにとつては慣れたもので、あまり効果的ではなかった。

ジャリジャリと木の葉を踏みしめながら足早に戻ろうとした。

…十数歩歩いた頃だろうか

悪魔の血つてのは情けないもんなんだなあ

その言葉を聞いた時、心臓がドクンと音を立てた。

カズオにとっては何気ない罵声だったかもしれない。

しかしセトにとっては色々な思いが込み上げてくる言葉だった。

忌み子と初めて言われた時の感覚を思い出した。

母を侮辱された感覚に陥った。

自然と：足が止まっていた。

ヤスタカ「お、おい氣にする事ないって」

その声をかけてくれたがセトには届かなかった。

落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせる。

風が森を駆け抜け、ザワザワという音だけが耳に反響する。

：思考が止まっている。

そして、気づくと、カズオを正面に見据えていた。

カズオ「やつとやる気になったか」

ヘラヘラと見下した声でセトに言う。

セト「今の言葉、捨て置けないな」

セトは未だ興奮している状態だったが

平静を保ちつつそう言った。

サトシ達はやめろと言うがやらせてくれと言うと

後でアカネさんに何言われても知らねえぞと決闘を認めてくれたようだった。カズハは依然反対している。

カズオは笑いながら木刀を渡してきた。

それを受け止め構える。

カズオはブンブンと木刀を振り回している。

そして、冒頭に至る。

カズオが大声を出した後、静寂の時間が流れた。

木の葉が落ちる挙動ひとつひとつに神経が集中する。

相手の目をしっかりと見据える。

先に仕掛けたのは、

カズオだった。

大振り、だが！速い！！

何とか防ぐ！

カズオは際限なく木刀で攻撃してくる。

セトは防戦一方、攻撃出来ずにいた。

こいつの攻撃は、デタラメすぎる！

隙がねえ!!

なら疲弊する隙を狙って!!

そう考えた瞬間。

セトの頭に重い一撃が当たった。

：頭の中がグラグラして：思考という概念が無くなった気がした。

サトシ達が悲鳴をあげる。

だが、何とか、何とか立てていた。

カズオ「まだ立つか、じゃあこれで終わりだ！」

今まで以上に速い一撃が降り掛かってくる。

セトは世界の全てがスローモーションのような感覚になっていた。

しかし、目は相手をしっかりと見据えている。

訓練での、動きを、思い出せ!

心の中でそれだけを唱えていた。ただ、ひたすらに。

そして、

木刀が地面に叩きつけられる。

背後をとったのは、セトだった。

鈍い音が森にこだまする。

セトの木刀はカズオの背中を叩きつけていた。

唾を吐き出しながらカズオは地面に手を付けていた。

すぐにサトシは

サトシ「これで終わりだ！もうやめろ！セト、すぐに治療するぞ。」

そう言つて駆け寄ろうとしたが、

カズオはまだだ！と叫んだ。

カズオ「鈴木家の俺様に手を付けさせるとはいい度胸だ！

ぶっ殺してやる！おい！あれを出せ！」

そう取り巻きの1人に指示する。

ハル「で、でもそれはやりすぎじゃ」

と言つたが

カズオは聞く耳を持たず木の影に隠しておいた刀を取り出した。

2本のうち1本はセトの刀だった。

カズオ「おら、てめえんだ、抜け」

それだけ言つとセトの刀を投げた。

セトは受け取り、刀を抜く。

その瞬間

カズオ「ちよつと！やめなさい！死んじやうわ！」

だが、2人に声は届かなかつた。

刀を握つたセトは内心ゾクゾクしていた。

理由は分からないが体中の細胞が喜び、血流がものすごいスピードで流れている。刀と、自分が一体になったような感覚に、喜びを隠せずに行った。

そして、

カズオ「ぶつた切つてやる!!」

奇声を発しながら斬りかかってきた。

セトは先程とは違い落ち着いて相手を見据える。

カズオの刀が降り掛かって来ようとした時

うっ、という声と共に何故かカズオの動きが止まった。

仕留めた

そう確信した時だ。

どこから現れたのか分からないが



アカネさんが間に入っていた。

……

サトシ「だから言つたろ！何言われても知らねえって！」

セト「うん、もうしない、アカネさん怖い……」

日が沈み始めた頃

4人は話しながら帰り道に居た。

あの後、アカネさんにカズオと一緒に怒られてしまった。

カズオは反省している様子は見られなかったが……

ヤスタカもカズオもサトシも

セトの無茶な行動に、多少腹が立っているようだった。

ヤスタカ「あのまま死んでたらどうするつもりだったんだよ！」

ごめん、としか言い様がなかった。

その後も多少怒られはしたが

最後は3人に

無茶はしないでくれ

としつかり言われてしまった。

そして各々の家に戻って行った。

日は沈み切っていて、随分長い事怒られていたなあ

そう思いながら

家のドアを開ける。

カラス達は相変わらずの明るさで、迎えてくれるのだった。

……

和夫達は無言で帰路についていた。

取り巻きの1人、ハルが重い口を開く。

陽留「カズオさん……なんであの時、動きが止まったんですか……」

そう言うと、

大輝「そうつすよ！あのまま行けば傷付けるくらい出来たはずですよ！

まさか、ビビったんじゃない」

そこまで言う」と

カズオ「馬鹿言え！ビビってなんかいねえよ、木の葉で足が滑っただけだ……」  
だが、そこまで言って自分に疑問を持った。

本当に滑っただけか？あの時、何か、違う感情が……

あいつを斬ること自体には恐れてねえが、あの時、何かが……

カズオ「だー！考えたって分からねえ、あいつに勝つためには訓練しなきゃならねえ  
！」

そう叫び、取り巻きの2人に明日から訓練するぞ！

と声をかけたが2人とも和夫さんらしくないですよ……と言いあまりやる気ではない  
ようだった。

思ったより根性がない奴らだと知り、和夫は内心ガツカリした。

そして、翌日から2人を置いていき、訓練に励むのだった。

和夫は自分の血など考えないようになっていた。

全ては、あいつに勝つために。

……

珍しくカズオが訓練に参加していた。

俺に負かされたのが余程悔しかったらしい。

その面持ちはず昨日と比べ真剣で、覚悟が感じられた。

セト「これは…面倒くさい事になったな」

そう言うセトは、好敵手を見つける事が出来た喜びで

笑顔が隠せずにはいた。